

「百年・河清を俟つ」の語あり。その淵源を清めずして、末流のみ漂へるを戒める意味でありま
す。茲に今更贅するまでもなく、古來の幼稚なる舊式姓名學なるものは、畢竟、眞箇なる姓名學
の本源を知らず、徒らに運命學の假面を以て人を驚かし來つた、寧ろ世の迷信を煽動し、助長す
る一種の社會惡であります。

私の提説する「姓名學」は、茲に掲げました「五聖閣綱領」にも明かなる如く、飽くまで天人
地の本格眞理を究めて、世上流布の迷信を排し、妄説を斥け、純正なる綜合運命學を普及せし
め、以て濟世救民の大理想實現を所期するものであります。

五聖閣綱領

【第一】五聖閣は高遠なる運命學體系を樞軸とする精神文明を鼓吹して、國民思想及び實踐を
正導作興し、以て濟世救民の實を擧げ、國家富強の基を固め、國體の尊嚴を明かにして 皇

運を無窮に輔翼するを理想とす。

【第二】五聖閣は飽くまで天人地の本格眞理を究めて世上流布の迷信を排し妄説を斥け、正純
なる靈科學を普及せしめ、至誠一貫、社會の公道に遵從して有縁の衆位を匡救善導する使命
を體す。

【第三】五聖閣は天下萬衆に對し各個人を健全至幸に導き、其の充實完成せる人格の力を擴充
して、國家社會の向上發展に寄與せんとす。而して各個人を完成するには、先以て各自その
姓名を理信尊重することを第一義とす。蓋し自己の名を尊重するは自ら省みて徳を磨くの門
にして發奮精勵、努力向上も之に依りて起り、高尚なる品位、英邁なる人格も之に依つて生
ず。又父母長上の名を尊重するは孝悌忠信の誠を樹つる所以にして、衆庶の名を尊重するは
博愛慈善の道に入る基たるべし。而して長くも 至尊の御名を崇仰し、大日本帝國の名稱を
尊重する思想は總て國體の尊嚴を護り 皇運の無窮を禱る大精神に透徹する根本となるが故
なり。五聖閣の旨義正に此點に焦中す。

【第四】五聖閣は、常に天真爛漫の資性を養ひ、爽然愉悅の情を以て人に接し、宏懷清雅の態
を以て他人を遇し、飽くまで眞摯嚴正に事を取扱ひ、表裏反覆又は權宜術數を絕對に避け、
確信と明快とを以て有縁の衆位を光明に導き歡喜安心、向上勇邁の信念を與へ、一人たりと
も悲觀懊惱のものなからしめんことを期す。

【第五】五聖閣奉公の大精神・救世の大理想は天日の炳乎として照鑑する所なり。内外有縁の

衆庶相共に、須らく身を持つること謹嚴に、人に奉ずること敦厚ならんことを心懸け、自我を慎み自己を制し、總ての準則を確守して公正の道を完ふし、以て大精神・大理想に向つて邁進すべし。然れども天地時に異變なきにあらず、人生屢・磐桓あり、若しそれ一朝有事に直面せば、熱誠忠烈、平素の修養を傾け、百萬の敵吾獨り往かんの眞勇を以つて事に臨むべし。

かやうにして、姓名學なるものは、始めて社會的と永久性を其處に發見するのであります。

我が國歴代の朝廷に於いては、姓氏に關しては絶大なる意を用ひられました。これ畢竟、國家社會の民生活上、姓名を最も效果的に統一的にその必然性を發揮せしむるの一義に立脚された施政なりに信するのであります。

従つて現今に於ける「姓名統一時代」を招徠し、延いて「姓名尊重」の思想時代を實現するに至つたことは、過去歴朝の意の存する處を自ら實現したものであつて、私が提説する所の「熊崎式姓名學」の根本理念が、之れに淵源し、基調する所以であります。

熊崎式姓名學の體系は、東西・古今の總ゆる運命學の體系を綜合し、單化したものであることは、既に言及した如くであります。その根本理念に至りては、我が國建國三千歳に渉る大日本魂の凝つて發する正念と至心とに置くことを銘記されたいのであります。この理を推し進めたる時、前項に於いて「老・孔・莊の三子時代既に原理を發見し乍ら、その後に於ける何れの時代にも支那に私の所謂姓名學なかりしを不思議とする」と假に謂つて置いた私の言葉も、従つて何等不思議でなくなるのであります。素より熊崎式姓名學の原理は、之を西歐の科學より説明することも出來、之を東洋の哲學より證明することを得るに拘らず、之が西洋に發生せず、支那に創始せられなかつた理由も、又以てハッキリする譯であります。

明治天皇の御製に

眼に見えぬ神の心に通ふこそひとの心の誠なりけれ

と仰せられてゐます。以て教學の眞諦を悟了し得る御國風を拜し奉り、この「明治節」のよき日にこの感激の筆を執る次第であります。

×

以下、簡単にこの篇の結びとしての、諸項目を述べることゝ致します。因に、婦人名の考察は過去より現在に至る姓名史が男性を中心とする發達史であることに想到するとき、併せて研究するの要あるが爲であります。

婦人名の考察

上古は女の名も、男の名も同じやうであつて、その區別は唯・男を彦(比古又は比子)と呼び、女を姫(比賣又は比女)と呼びたるもので、今なほ直彦・武彦などゝ云ふは、其の習慣の残りたるものであります。然るに現代の如く、名を假名にて書くやうになつたのは、無論、假名作成以後のことであつて、奈良朝以降のことたるは疑ふべからざるものであります。然もその意は、女らしく優しく見えるやうとか、目下のものゝ名は、草書で書き、謙遜の意を表したものが、追追

流行し、遂に多く假名書きするやうになつたものであります。

×

維新前は、「殿」の字や「様」の字の書き様に、それぞれ方式のあつたことを知るのであります。——古いものには、名を假名で書いたものは、多く卑賤の人で、稀には身分ある人にも書いたものもありますが、今、之を文獻に徴しますと——

禁祕御鈔階梯に「候名按 ひさしき、うれしき、ゆりはな、久、龜、鶴、皆候名也。」とあり。又

玉藥に「承元三年三月二十三日、此日故攝政前太政大臣良經長女有入宮事」(中略)——
人々々々交名

〇女房

一車 近衛 政子太政大臣 忠雅女
 二車 按察 資子大納言 資賢女
 三車 師 經子權中納言 親經女
 四車 兵工督 能子從三位 季能女

五車 辨 行房朝臣女 行子
 六車 佐 兼資玄 廣子
 七車 加賀 仲基朝臣 基子
 八車 ○ 爲成女 爲子
 九車 うれしき 爲重女 爲子

春 日 通子内大臣 通親女
 中 納言 季子從三位 季定女
 沼部 卿 顯子從三位 同經女
 大 貳 長房朝臣 長子

少 納言 輔朝臣女 輔子
 播 摩 仲基朝臣女 仲子
 芹 川 以實女 以子
 ○ 秀康女 季子
 ひさしき 光季女 光子

(已上上藤)

(已上下藤)

左衛門 佐重光女 讚 岐 頼兼子
 下 仕 なるてふ はなさく
 上 雜 仕 さゆりは はつはな
 雜 仕 あけまき さなみ

など、身分賤しきものゝ名は假名で書いてあります。

伊豫の國觀念寺文書に――

くわんねんじにきしんしたてまつるしたち
 あわせて五たん ていればありとくつねみやうのうち あさなごたんばたけ にいのまご四郎
 やしきなり (中略)
 けんむ五年六月二日
 にいのもりやすのこけ みなみだぶ (花押)

などあり、然しその數甚だ稀にして探し求むるに容易でない位ですから、多く名は假名で書か
なかつたものと見へます。

又、その反證として之を徴すべきものは、下民も、尙漢字を用ひ、假名は却つて、當時の變則
であつたかとも考へられます。

東大寺奴婢籍帳に――

婢・飯古咩	三十四年	婢・伊蘇女	三十三年
婢・多比賣	八十九年	婢・白刀自賣	十八年

とあり、之等の例、隨處に散見されるのであります。然しながら、文字なき時代にありての命
名は、親の意志を言葉に表はし、單に呼ぶのみであつて、之を形に現はすことは素より無かつた
ものでありますから、文字傳來以後と雖も、今日の如く、「假名で書くべきものである」とか「漢

字で書くべきものである」とか申すことは全くない筈であります。されば、それがどちらであつ
ても隨意でありますけれども、苟も書いた文字によつて、その運命に開發・杜塞の關係が、明瞭
なる今日に於いては、銘記すべき大事であることは、既に論なきものであります。

子の字の史實

古來、婦人の名に

「某刀自」	「某蟲」	「某賣」	「某咩」	「某女」	「某子」
-------	------	------	------	------	------

簡略式姓名學體系

「於又は阿」

などといふ字を附けたものがありますが、庶人は概ね「某女」と云ひ、身分尊き人には「某子」と稱したやうであります。然しそれは實名に限り、呼名には付けなかつたとする説もあります。又字音の名に「子」の字を付けること——例へば

「揚子」

「關子」

の如きものをも批難する人もありますが、その理由は確かではありません。大體、呼び名といふものは、官名とか、町の名、又は幼名等と呼んだものでありますから、

「紫式部子」

「清少納言子」

「一條子」

「三條子」

「堀川子」

また、幼名としては

「ちやち子」

「よゝ子」——「よゝ子」は今の「ヤゝ子」

など云へば、如何にも釣合ひが悪くない。

x

また、字音の名に「子」をつけることの片腹痛しといふ「名字辨」の作者の意は

「子は國音であるのに、異國の音を結び合すことは不都合である。」

との謂でありませうが、蓋し上古に於いては「子」の字を男子にも用ひてゐます。その有名なものは

「蘇我 馬子」

「中臣 鎌子」

「小野 妹子」

などあり、之を研究してみると、「馬子」「鎌子」等の「子」は「某の子なり」といふ意味かと云ふに、敢てさうではないのであります。「子」は即ち「比古」「比子」又は「彦」や、「郎子」の「子」であつて、原は男性の稱でありましたが、女性と雖も、一朝・事ある時は、男性に譲らじ

といふ女性の氣力盛んなる時代に於いては、他人より男と同様「雄雄しき人」といふ尊敬の言葉であつて、單に「男の子」「女の子」といふ「子」とは、自ら意義を異にしたものであつたことは疑ふべからざるものであります。

x

我が國にて、女の名に「子」の字を付けたる始めにつき「貞丈雜記」に――

「欽明天皇の時、遣三青海夫人「勾子」、又、春日日抓臣の女「糠子」とありて、女に子の字を付けたる始めなるべし。」

と、あり、この「勾子」といへる人は、かの三韓事件の同伴金村慰問の爲に遣はされた官女であり、「糠子」と申すは 欽明天皇の皇妃であります。その後、奈良朝時代になりますと、藤原氏の勢力、最も盛んにして、當時女は必ず「子」の字を付けたやうであります。

次に「蟲」といふ字は、上代にありて和氣の清麿の姉「和氣廣虫」などは有名なものであります。この言葉が今日に傳はり、娘の字を當て、「むすめ」と讀むは、即ち「虫咩」の義であります。

「刀自」といふ眞字を今尙用ひる習慣が残つてゐますが、之も上代からあつたもので、

——播磨風土記に

「飯盛山、讚岐國、宇達郡、飯神之妾、名曰飯盛大刀自。此神度來占此山而居之故名飯盛山。」

又、續日本紀に——

「天寶子六年十月巳未、夫人正三位縣犬養宿禰廣刀自薨。」

とありて、有夫と否とに拘らず、一般婦人にも用ひてゐるのであります。

夫人と書いて「おほとし」と訓じ、また妙齡の女にも「何刀自」といふ名がありますから、漢字傳來の後、婦人といふことに「刀自」の字を當て、「大刀自」又は「邑刀自」など書いたものであります。

「阿」の字に關しては、高師秋が菊亭殿に在りし「阿才」といふ女を奪ひしことが「太平記」に見えてゐますから、その時代より用ひられたことを知るのであります。

而して、舊姓名學では斯の如き史實考證に暗きが故に「子」の字を女性の形容詞位に心得、恰も「刀自」など同一に取扱ひ、字畫算定に入れてゐませんが、これは大なる誤りであります。

他各種の運命學の眞髓及び易理に則れる絶對哲理を綜合するものたることは、勿論であります。が、簡單にそれを説き明かすことはこの短篇小句の能くする所でありませぬ。殊に本著は、その豫告の頁數を既に百頁も超過せる模様でありますから、その詳細は、私が目下、草稿を急ぎつゝある「運命學原論」に譲るに止むなく、茲には唯、フレノロジーと姓名學との關係に止めて置きますが、この點、大衆の諒とされんことを冀ふものであります。——即ち、熊崎式姓名學五格構成中、人格部に、例へば「二十四」といふ數字ありとせば（盈數「二十」を拂つて残りの「四」を以てその人の性格を観る）頭腦四十二心性中、その人は辯舌に長ずるの數理なるに依り、下賤（涙堂又は臥蓋宮）の處發達し又、財資豐厚の暗示力は理財性の部位を刺戟發達せしむることが先づ特徴であり、更に人格部に二十三の數ありとせば（圖面では上部）「自尊」の部や「強硬」の「名譽」等の骨相に必ずや發達すべき誘導、暗示を與へ、遂に權威、名譽等に儼れる性情あり、急進的人格を生ずる——といふ風にこの四十二心性と五格中の人格、地格、總格、外格にある八十一數變動とは相關密接の關係によりて、その人一代の運命を支配するのであります。素より姓名如何によりては（改名等によりて）人相、骨相及び手相が變化する道理も、茲に存する所以であり

ますから、この理は、該當數理と、掲出圖面とを参照し、類推省察して正しき悟りを自ら得らるるやう、特に附言して置くものであります。

孤寡運の宿命

宿命は、父母の遺傳、環境等に源を發するもので、佛敎家の所謂輪廻の説を運命學的に證明することを得る譯であります。

父母、祖父母或は伯叔父母關係等に於いて、家庭生活の不純とか、再縁、三婚、幾變轉とかいふことのあつた場合、その子女に、所謂後家運なるものを生ずることが非常に多いのであります。

これを人相學を以て律すれば、額廣く、口が大きいとか、或は耳朶が豊に肥厚してゐるとか、顴骨が突張つてゐるとか、顴骨が秀てゐるとか——總て男性的風貌に見らるゝのが後家運で、縦しや美人と謳はるゝ人でもこの運命の人は何處かに這の後家相を持つてゐるものであります。さういふ人の生年月日時を推命學に依つて調べると、必ず寡婦となるべき宿命星があり、更に

その人の名を見ると、私の既著「姓名の神祕」及「運命の神祕」等にも説いてある通り、二十一、二十三、三十三等の頭領寡婦運の數、或は準寡婦運たる二十八數乃至は九、十、十九、二十等の孤獨運を持つてゐることが明かに認められます。

かうした人人が、娘時代に良縁に恵まれず、嫁して後も、多く不和、生死別等の悲運に遭ふか形式は夫妻にしても事實上は寡婦と選ぶなき孤獨、寂寥の状態となつてゐることは事實不思議な位であります。

是等の人達が、自ら運命轉換を望まんとして、その名を變へた場合、それが自撰のものにせよまた世間舊來の姓名學家に撰名して貰つたにせよ、必ず以前の名と比べて、何等變り榮えのない宿命星と同じ暗示、誘導力を有する名をつけて居る——それが何回改めても同様なのですから如何に運命の連鎖の微妙にして、啓示の嚴正なるかに驚かざるを得ないのであります。

最近、私が接した一例を挙げますと、六度改名して、六度とも寡婦運たる姓名の連鎖を有つ一女性があります。

x

東京市外、東中野に居住する、大武良久子なる人（名門の方につき故に匿名・變名を用ふ）であります、この名は私の門人の撰名に係るもので、同女史は明治十六年十月南海の著名藥種商の家に生れ、本年四十九歳であります。

その娘時代、杉田憲齡と稱され

杉 7
田 5
憲 16
齡 20

十八、九歳の時、腰本氏と婚約が出来たが、

腰 本 憲 齡
5 16 21

と、なり同じく人格部に二十一の頭領寡婦運が生じ、早くも婚約中に破れてしまひました。次いで寺尾某氏と結婚されて

寺尾 憲 齡

7
16
23

となつた結果が、矢張り一年足らずで破鏡の嘆を見、次ぎに大武家に嫁して

大 武 憲 齡

3
8
12
20
23

と爲り、外格部に二十三の寡婦運が依然として、執念深くも纏はり、今度こそは辛抱し通さねばと熱誠を籠めて仕へたも暫し、程なくも夫君と死別さるゝの憂目を見られたのであります。

そこで憲齡女史も餘りの悪運に、之は名前が悪いのだらう、と考へて「清」と改められたがこれまた

大 武 清

3
8
12
23

と爲り、總格に二十三數が表はれました、まだ二十歳代のこと、爾來幾度か縁談もあつたが、所謂「帯に短かし褌に長し」で、或は纏まらなかつたり、氣が進まなかつたり——悶悶の裡に數年を送つた末、何とかして運命の轉換を圖りたいと志して、某舊姓名家の許に行き、

大 武 憲 代

16
5
21

と改めて貰つたが、矢張り御覽の通り地格部に二十一數がついて、遂に二十歳代から後家を立て通して終ひました。

×

その後、偶ま私の著書を手にして、熊崎式姓名學を知り、餘りの不思議さに、近くに住む私の門人に頼んで、昨年、現在名の「久良子」に改められた次第であります。

斯の如く、六回も改まつたり、改めたり——偶然と思はるゝ婚家の姓と接続しても、とにかく

専門家である姓名學家の撰名も、その悉くが一致したといふ例は餘りに稀であります。もしこの女性が熊崎式姓名學を知らずして、又また他に依頼すれば、依然として同じ數が纏はりついで恐らくは永久に寡婦運から脱却することが出来なかつたであらうと思ひます。

X

その他、二回、三回の改名が同じ結果になつて、寡婦運から逃るゝことの出来なかつた人が、私のもとへ来て、熊崎式姓名學による撰名に、初めて救はれたといふ例は、殆んど枚擧に遑なきほどであります。

因に「松平里子」氏の如きも、その一例で同氏は「松平佐登子」とも稱され外格二十三の頭領運あり、依然として本名の總格と同じ數理を示し、更にその舊姓「岩田里子」の二十三數が飽くまで絡んでゐることを知るべきであります。

音の靈導大觀

姓名學上に於ける暗示の發現は萬有の大原因たる數理と、その數理の動きによつて生ずる音と

にある。是れ即ち數は理にして、音は靈なりと云ふ所以であります。本來「數」は大宇宙本然のものでありますから、その人に對して働きを與へるには五官や、意識を超越し、直に精神の上に力を及ぼすのであるが、音は「感じ」であり、感じは「リズム」であり、リズムは「波動」であります。この波動は即ち數を以て測定し得るものでありますから「波動即ち數」といふことになる。數が既に波動に變形した以上その人間に及ぼす影響は、聽覺——耳より入つて腦細胞を刺戟し、その活動が精神に及んで、茲に所謂靈動力なるものが發生するのであります。この理を以てする時は、數理が主體であり、第一次的であつて、音靈は從體であり、第二次的であるといふことが出来る。

隨つて、姓名學上の音が人の運命に影響する所は、音その儘の波動であつて、決して文字そのもの、質ではない。故に舊式姓名學のやうに漢字の音讀、即ち支那讀みを云云して、その吉凶を斷ぜんとするが如きは、根本的の誤りであつて、その文字が漢字であらうと、假名文字であらうと、乃至は英字、梵字、諺文の何れであらうとも、音訓などの差別なく、實際に讀下し、呼び做す發音その儘の音色と、音律とに依つて其の可否を考究しなければならぬものであります。

吾れ吾れが彼の、僧侶の誦する梵唄を聴聞して居る場合、その難解なる經文の意義や、質を考ふることはむづかしいが、その音色、音調によつて、何とはなしに或る敬意、尊敬、法悦さを懷られる氣分がする。これ即ち一種の音樂的リズムが聴覺を通じて、腦細胞を刺戟するが故であります。

X

豪壯なる放吟、哀切なる悲歌、或は淫蕩的俗語、慄逸なる吟詠等、その歌詞と共に、音そのものリズムによつて、それぞれの精神的感動や、魅惑を受け、情操を咬られるのも之が爲であります。

ピアノ、ヴァオリン、琴、笛、太鼓、三味線その他諸種の樂器から受ける波動は、假令その歌詞を知らずとも、その調子——リズムに依つて緩急、強弱、悲喜、愛憎それぞれの感じを精神に移すこととなる。

X

鶯や雲雀の囀りに、春の長閑さを思ひ、虎、狼、獅子、熊の咆哮に、一種の恐怖感を持ち、

犬猫の聲に親しみを感じ、フクロや烏の聲には餘り快感を懷き得ないのも、その音色と波動とに基くのであります。

故に、人の姓名や、物の名には、この自然理に基いて音調を律し、音色を整へることが大切であります。

X

我が國は古來、音靈の幸ふ國と稱され、一種の音階的に、五十音なるものが整調せられて居るこの五十音の整調は勿論、我が國の發明ではなく、遠き幾千年の昔、已にサンスクリットに於いて組織されて居たのであります。夫れを克く我が國の國情や習慣に當嵌るやうに編成せられたのが五十音であります。

この十列五段階の、五十音の適當なる組合せが、即ち言葉であり、姓名であり、物の名となるのであります。その言葉や名に當嵌めらるゝのが所謂文字であります。萬有の基本たる數は、文字を通じて發現し、文字は視覺を通ずるが、數理は五官を超越して精神に入ることとなる。蓋しこの場合、音は、決して文字を通じて起るものではなく、數のリズムに依つて發現し、聴覺を経

て精神に入るのであります。

X

故に十列五段階の、音の組合せは直に聴覚を刺戟する波動となるのであります。その波動が、人間の精神や肉體組織に適切なるや、否やを定むる姓名學上の標準は、五十音を「木」「火」「土」「金」「水」の五行に配分し、その五行の相生相尅の理によつて考慮するのであります。

X

「木」「火」「土」「金」「水」の五行は、總ゆる運命學の根本義を爲して居ますが、之は決して一部論者の云ふが如き、木火土金水の實體では無い。即ち世間の所謂學者が想像するやうな五要素でもなければ、又五惑星の名稱でもない、全く別箇の意味から來る所の、萬古不動の大哲理を表明せるものであります。この解説は「熊崎式姓名學大奥義」(五聖閣發行)に於いて述べてあるから茲には省略いたしますが、要するに「五行」はかの四聲・五韻などゝ異り、主としてその音質、音色の硬軟・強・弱・粗密・緩急等を區別する一種の便宜的名稱と考へても差支ないのであります。

X

或る強き音に續く弱き音は、自ら其の存在の力薄くなり、或る急なる音に従ふ極めて緩なる音は、自らその緩急を和調する力を示すこととなる——この平明なる論理を、一種の別名稱に於いて、分り易く説くものが五行の「木・火・土・金・水」であるとも云ひ得るのであります。むつかしき論議や理窟は一切ぬきにして、今、五十音を五行に區別すると——

▲……「ア」行・「ワ」行・「ヤ」行は土性。

▲……「ハ」行・「マ」行は水性。

▲……「サ」行は金性。

▲……「タ」行・「ラ」行・「ナ」行は火性。

▲……「カ」行は大體木性に屬するが、中に土性に屬するものあり。

この單純なる區別を記憶易からしむる爲めの歌詞が——

「ア・ワ・ヤ土

ハ・マ水

サ金

タ・ラ・ナ火ぞ

カは木なれども土につくあり」

であり、その應用は

▲……木の性は火の性に相生し

▲……火の性は土の性に連続し

▲……土の性は金の性に展生し

▲……金の性は水の性に密接し

▲……水の性は木の性に接續す。

この順序が、所謂「五行」の「相生」であり、相生は穩健を意味し、平安を暗示し、靜寧の誘導力を與ふると共に、考へやうに依つては、無氣力、無活氣、非活動的の意味にもなる。これを反對に――

▲……木の性は土の性を抑壓し

▲……土の性は水の性を尅害し

▲……水の性は火の性を制伏し

▲……火の性は金の性を壓倒し

▲……金の性は木の性を屈伏す

これが即ち五行相尅の理で、互に性情相反し、相敵し、相戦ひ、相害ふといふ意味であります

す。この相尅の暗示は波瀾、變動、障害、防制等を意味するが、同時に他面には活力の醸成、反撥力の振作、敵對、壓倒、驀進等の誘導力を發揮するといふことにもなるのであります。

×
音の五行が、人間の運命上に影響することは、前に述べた音楽や、鳥獸の聲を聞いて、その時の感情や、心性を動かす點から考へても納得し得ることであり、之を心理學的や生理學的に十分の解説を與ふことは可能であるが、それは他日に譲り、唯一言にして之を現せば、その發音の力の調律が人間の聽覺を通じて腦細胞を刺戟し、その活動状態に微妙なる作用を與へ、之が精神に及び、延いて血液機能、肉體組織の上に種種なる變化を發生せしむることになる——その音の力の調律といふのは、畢竟數の働きによつて生ずるのであり、この數の働きを概念的に、常識的に理會して、五十音の性情を區別したのが、所謂音の五行であります。

×
即ち「ア・イ・ウ・エ・オ」と發音するのは、口を淺く開いて喉の奥より聲を出すことなるから、之を母音と云ふ。その音質、穩かにして重みあり、之を長く引くも

- 「ア ア
- 「イ イ
- 「ウ ウ
- 「エ エ
- 「オ オ

の如く、その韻は矢張り發聲と同一にして變化なく、變化のないのは所謂根本音であります。之を地球上に住う人間の感情から考へると、大地の如く重厚にして變化なく、永遠性にして親しみ深し等の思ひがする。故に之を土の如き感があると云ふ理由から土性としたのであります。

- 「ヤ・イ・ユ・エ・ヨ
- 「ワ・キ・ウ・エ・ヲ

は、古來これを半母音と稱し、前者は口を淺く開き、深く合して發音する喉音であり、後者は比較的口を深く合して發する喉音の差はありますが、何れもその本質は「ア」行音に酷示し、長音となつた場合は、その韻は皆「ア」行音に歸する、故に此の二行音も亦、土性の中に加へられたのであります。

「カ・キ・ク・ケ・コ」

の發音は、牙音と稱し、その音質、硬難適度にして、人間の感情に對し、激しきに過ぎず、又緩にも失しない、例へば木造家屋に住み、木造の器具を用ひ、木履を足にするといふことが東洋人に適するが如く、「カ」行音に對する時は、石や金に對する如き、酷剛不即の念はなく、親昵寛容の氣分を生ずる。これ即ち「カ」行音を木性なりとする所以であります。但し支那文字にて「ア」行音に屬するもので、日本の音讀が「カ」行音に變化してゐる文字がありますから、中に

は土性に屬するものがあるといふ譯です。例へば「雅」の如きがそれであります。

「サ・シ・ス・セ・ソ」

と、發音するのは、齒の力を藉らねばならぬ。齒と齒との隙を漏れ出づる息の勢に依りてこの音が生ずる、故に齒音といふ。その音調は恰も金屬性のものを摩擦し、軋轢して發する音の如く、如何にも急迫・激烈・燥擦の感がある、延いては冷冷として親しみなき金屬性のものに觸るが如き思ひあり、これ即ち「サ」行音を金性とした所以であります。

「タ・チ・ツ・テ・ト」

「ナ・ニ・ヌ・ネ・ノ」

「ラ・リ・ル・レ・ロ」

の、三行の音は、何れも舌を以て、口中の上顎壁を打つて發する音であるから、舌音と稱せら

る。その音調は、猛烈なる火炎が爆炸の音を立て、燃ゆるが如き酷烈・燥念の感がする、これ即ち、この三行の音を火性とした所以であります。

「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」

「マ・ミ・ム・メ・モ」

の、二行の各音は、唇音と稱し、軽く唇を離合せしめ、齒舌の力を藉りて發する音で、その聲調は、如何にも暢やかで、當つても手應えの少ないやうな感じがある。例へば淡淡として物に、コダわらぬ水の如き思ひがするので、この二行の音は、何れも水性に屬するのであります。

X

斯の如く五十音の五性別が、その音質に基く區分なりとせば、姓名に對する五行の相生相尅なるものも、發音その儘でなければならぬ理由も明かとなる譯であります。

舊姓名學の如く、實際にその名を呼ぶ時、發音もしない漢音に引戻して、五行を附することの

誤りなることは、最早多辯を要しないのであります。

例へば「松平里子」は何處までも「マツダイラ・サトコ」であつて、舊姓名學が之を「シヨウヘイ・リ・シ」として五行を附することは、根本に於いて意義を爲さぬ。

「山田わか」は矢張り「ヤマダ・ワカ」であり、決して「サンデン・ワカ」ではない。「井上準之助」は「キノウエ・ジュンノスケ」で、斷じて「セイ・ジョウ・ジュン・シ・ジョ」と區別すべきものでないといふことが明白であります。

X

姓名の發音に五行を附することは、叙上の如く、極めて平易であります。その音の勢ひ、音の力、音の色に依つて、所謂五行の制尅生化を考へ、之を數理の靈動力とを對比せしめて、完全な組織を工風することは中面倒で、相當緻密な考慮を要することになるから、一概に單純なる方程式を立てるのが困難であります。詳しく説明すればする程、普通の人には分り悪くなり、却つて惑ひを生ずることになるのみならず、音靈の働きは五行の相生相尅の外に音色そのものより生ずる感じ、即ち聴覺より意識の上に反映する音の色彩なるものがあります。例へば「ミ」と云

へば「美」を聯想して美的觀念に投合し「シ」と云へば「死」又は「辛」を聯想して苦難的の感念を催し「カ」と云へば「輝き」を感じ、「ト」と云へば「止る」を思ふといふ様に、習性的に何ものかを聯想する所の心理的影響が生ずる——而も其の聯想の影響は、五行の區別より來る生尅制化によりて、發音の前後とか從屬とか、その位置とかによつて個個・別別、所によりて力に變化があるから、愈よ面倒であります。左様な面倒なことを餘り氣にするといふことは、初學者には聊か無理であります。故に大局に於いては先以て、數理に重きを置き、その他に於いては、成るべく水性と火性との如き激發急燥なるもの、又は火性と金性との如き忍苦慘虐の思ひあるものを慎しむと、姓名の人格部を構成する點——姓の下字と名の上的字との發音關係を出來得る限り相生的配置にすること、及び同性文字の連續を避け、成るべく幾種かの別性の音を配すること位の點を、注意すれば宜しいでせう。

音讀の漢字は、大體一音か然らざるも一韻を引くのみであるから、之らの文字に五行を配當することは簡單であります。が、訓讀のものはそれとは趣を異にし、一字にして幾音にも亘るので

あります。例へば「安」「芳」「晃」「肇」「渡」「清」「進」「平」の如きものであります。之等は勿論その音の一つ宛が、五行の一つ宛であります。が、その力の強弱は初音に重く、次音・三音に弱きは通例でありますから、その音色の輕重は、主として訓讀の初音に重きを置くこととして大して差支ありません。

次に、五十音の靈動・大意と、五行の關係に依つて生ずる力の消長・増減の大略を表示しませう。

【註】五十音の靈動力は會て「姓名の神祕」にも掲載しましたが、本書に於いては成るべく省略すべき點は省略し、その比較的重き點のみを抽出して、解り易からしむべく努めた爲、一見内容に相違がある如く感ずる向もあるかも知れませぬが、その根本義に至つては同一であることを悟了されんことを希望するのであります。

ア行音の靈動

(音喉) 性土・行ア					五行 音
オ	エ	ウ	イ	ア	音靈大意
稍々頑固に傾く、時々不和合に陥る虞あり、結ばれ解けぬ意、色難を戒む。	立伸ぶる象、集りて又分るゝ意、育て養ふの力あり、一面は順、一面は逆を示す。	決斷心鈍き意、無爲を樂む、迷ひ易し、住所不定、動搖流轉を慎むべし、	人望を得て發展成功の象、進み過ぎは不可、愛に溺るゝ勿れ、用意周到ならば必ず目的を成就す。	人の上位に立つ、權威あり、實踐躬行の象なり、先見の明あり、獨斷專行を戒む、虚榮を慎むべし。	音靈大意
				「カキクダチツテケコ」のト、ナニオ、ヤイソの音にホ、マミ	對木性
				音に對しヌネノ、ユエヨ、對してはムメモ、	對火性
				ては其特ラリルレワキウエ其特性をの音に對	對土性
				性を抑制ロ、の音ラ、の音減消するしては互	對金性
				に對してに對しても順調な	對水性
				は其特性は其特性	
				を増大す和調す。	
				して其特	
				性を消耗	
				す	

カ行音の靈動

(音牙) 性木・行カ					五行 音
コ	ケ	ク	キ	カ	音靈大意
注意深し、動搖の弊あり、外交的手腕に富む落付きなく膽力乏しきも愛情深し。	希望満つるの象、短氣且つ陰氣の弊あり、衆信を受くる徳を有す。	議論好き、忠義立ての意氣あり、上位の恵みを受く、利を得る象、愛敬深し。	精力絶倫の象、威勢強し、色難を慎め、人の忠言を容るゝ雅量を養はゞ吉幸を得。	輝き渡る象、財寶を得る力あり、潤達なり、智能深く何事にも勝を制す、妄進を戒む。	音靈大意
				カ行音にタ行	對木性
				對してはナ行	對火性
				ア行	對土性
				ヤ行	對金性
				サ行音にハ行	對水性
				對してはマ行	
				其特性を音に對し	
				抑制さる	
				ては其特	
				性を増大	
				す。	

サ行音の靈動

(音齒) 性金・行サ					五行
ソ	セ	ス	シ	サ	音
從順にして愛心深し、財寶に縁あり、成功者多し左れど独立的ならず、隨從的なり。	活氣あれど雅量に乏し、熱情の爲め色情に迷ふ、權威を有して妄進の失あり、雅量を養ふべし。	人の世話をなして損失あり、薄弱、孤愁の象、色情を戒む、何事にも滯滞の意あり。	沈着なれど情に乏し、辛苦を自ら招く、締め括るゝの意あり、時に薄命孤寒を嘆ず。	活動的發展を好む、家を出て、功をなすもの多し、人望を集め人を率ゆるに至るも壯進を戒む。	五行 音 大意
	後には稍性を制壓性を増大し或は軟特性を減す	強むるもては其特ては其特却て反撥の中に其後には稍性を制壓性を増大し或は軟特性を減す	其特性を音に對し音に對しなれどもては願調ては同性音に對し	カ行 タ行 ア行 サ行 ハ行	對木性 對火性 對土性 對金性 對水性
	々消耗させらるす	々消耗させらるす	音に對しナ行 ワ行	音に對しマ行	

タ行音の靈動

(音舌) 性火・行タ					五行
ト	テ	ツ	チ	タ	音
消極的の象、故障起り易し、災厄を未然に防ぎ、隔て遮らるゝ意あり、勇氣を振起すべし。	進取の氣象強し、萬難を排して進む活氣あり、向上發展の元氣に富む、不用意妄進を慎め。	剛毅の質、自我心強し、虚榮の女子あり内外不和に陥る虞れを生ず、獨斷專行を戒む。	忠實勤勉技能優る、不撓不屈功をなす、勞苦を厭はず蓄財に巧みなり。	濃厚の中に争心あり、安逸を求め波瀾を好まざ、實直にして氣概稍々乏し、希望成就の意あり。	五行 音 大意
	加ふ	相和して性稍、減消耗す	益益増大音に對し音に對し性大に反ては其特	カ行音にタ行 ナ行 ヤ行 ワ行 音に對しマ行	對木性 對火性 對土性 對金性 對水性
		燥急性を消す	伸長す	カ行音にタ行 ナ行 ヤ行 ワ行 音に對しマ行	

ナ行音の靈動

(音舌) 性火・行ナ					五行
ノ	ネ	ヌ	ニ	ナ	音
あり。發展の象あれども人の爲めに災を受くることあり。	女子は目下のものと色難あり。	氣力乏しく薄命なり、女子は良縁乏し。	窮迫鬱屈の象、艱苦、孤獨、不具、遭難の象	長上に立つは不可なり、隨從的地位にありて成功す、忠實、忍従、不撓、克く責任を盡す。	音靈大意 疑心深し、用意周到克く成功す、働き手なり、意地悪き點を矯正すべし。
			揮さる	カ行	對木性
	大す	性大に増	ては其特	タ行	對火性
	耗す	性大に増	ては其特	ア行	對土性
		性大に増	ては其特	サ行	對金性
		性大に増	ては其特	ハ行	對水性

ハ行音の靈動

(音唇) 性水・行ハ					五行
ホ	ヘ	フ	ヒ	ハ	音
發明心あり、才能技藝に長ず。	外面沈着なれども稍々疑念あり、博達にして	退嬰消極の意ある一面に固守持久の長あり、	理想高く、文學技藝に長ずる才能あり、決斷	活氣あり積極的に發展す、智略あり外交に長	音靈大意 功名榮達、福財多し、忍耐強く思慮深し、良縁あり家庭幸福なり。
		減さる	其力は消	カ行	對木性
	す	性を減耗	ては激衝	タ行	對火性
	る	抑壓せら	ては其特	ア行	對土性
			性益、發	サ行	對金性
	はる	亡の虞加	和調する	ハ行	對水性

マ行音の靈動

(音唇) 性水・行マ					五行
モ	メ	ム	ミ	マ	音
<p>智謀あり克く人心を收攏す、成功の人となる 徳望なり巧に人を服せしむ、雅量大にして且 つ清廉なり。</p>					音靈大意
<p>敬愛と美容の象、自ら品行を慎む要あり、左 れど溫和順正克く幸福を保つ。</p>					對木性
<p>獨立心乏しく、不活動停滯不幸に陥る、財壽 共に薄く、家族縁亦恵まれず。</p>					對火性
<p>節義心薄し、色情に陥り易し、虚榮に身を誤 る、萬事實意を缺く。</p>					對土性
<p>實際上手にして友を作るに巧みなり、男女と も異性の爲めに身を過つこと多し。</p>					對金性
<p>波瀾多しせらる</p>					對水性

ヤ行音の靈動

(音喉) 性土・行ヤ					五行
ヨ	エ	ユ	イ	ヤ	音
<p>智略あり功を收む、權威に過ぎて不和の虞れ、 頑固に陥るものあり、虚榮と色情とを戒む。</p>					音靈大意
<p>ア行のイと略々同様の靈動を有す。</p>					對木性
<p>克く難を凌ぎて成功す、稍々哀調あるも敬愛 多し、美容美音清雅の象。</p>					對火性
<p>ア行のエと同音、靈意相通ず。</p>					對土性
<p>世話好き親切心多し、愛情濃かなり、勉強努 力の爲、顯れ集るの意あり。</p>					對金性
<p>性大に増性同比調なり</p>					對水性

ラ行音の靈動

五行音					五行音
性火・行ラ					音靈大意
ロ	レ	ル	リ	ラ	音靈大意
廣き心、強き力、萬事成功の意多し、人の上位に立つ象、尊敬を受くる意。	交抄談判に巧みなり、嫉妬と自我を慎むべし智謀あるも心狭し、才能あるも一方に偏す。	從順にして我意なく、温情ありて人愛深し、寛大にして時に因循に陥る、嚴肅なる修養を要す。	一徹の心より人に疎まる、恨まされば憂苦生ず、遭難と離愁の暗示あり、思ひ切りよき性質。	財縁あり外交的手腕に富むも心不定なり、家庭の風波を豫防すべし。	音靈大意
			進す	カ行	對木性
			過大す	タ行	對火性
		比和特性	耗す	ア行	對土性
		す		サ行	對金性
				ハ行	對水性

ワ行音の靈動

五行音		五行音
土性		音靈大意
キ	ワ	音靈大意
ワ、エ、ヲはア行音の同音と音靈相通ず。	長上の位あり、財縁あり、先見の明を以て克く成功す、家運興隆の象。	音靈大意
	ア行と同	對木性
	同上	對火性
	同上	對土性
	同上	對金性
	同上	對水性

熊崎式姓名學の大略は右にて略ぼ説明し終つたが、斯學は極めて深奥なる綜合哲學である爲め、其眞髓を究めんとせば進んで「大運神一千種の靈動」並に「歲月流年の吉凶」等に互る祕法を解説しなければならぬが夫れは到底此の小冊子の能くする所でないから、別に「熊崎式姓名學大奧義」天人地三卷の中に詳述して特別の研究家に頼つことゝした、又斯學の學理論に就ては目下執筆中なる「運命學原論」に譲ることゝし、次に第五篇標準字典に移ることゝします。

五聖閣編輯子・因に記す。

熊崎先生、恰も「姓名哲理」草稿整理中（昭和六年九月二十日）東京朝日新聞紙上に「平安朝
 以来の穀を破り、生れかかはる假名遣ひ」といふ四段抜大見出しを以て報道されたる我が國の國
 語、字音、假名遣ひ改定案に關しては、大正十三年十一月、臨時國語調査會で原案決定以來、
 今日に至るも何等實現するに至らなかつたが、愈よ政府に於いても文政審議會に附議すること
 になり、茲に於いて平安朝以來の假名遣ひは完全に廢止され、國語上に大革命を實現すべき機
 運に向つたと記載されてあり、五聖閣編輯子、偶ま此事に關して先生の意見を伺ひたるに、先
 生は莞爾として示されたのが左の三卷の書籍であつた。

▲明治三十九年出版「簡明速記術」

▲明治四十年出版「最新速記術」

▲大正三年出版「新式速記術獨修」

而して第一次の著は約二十五年前の出版であります。然るにこの速記術革命の諸著述の中に
 は、音に速記學の創意のみならず、我が國國字問題解決の創見あり、今茲政府に於いて文政審
 議會に附議するといふ、その假名遣ひは、そつくりその通りの假名づかひ提唱が、實は先生の、
 出版された今から二十五年前の著述を以て既に之を見るのであります。

「政府は少くとも、先生の頭より二十年は晩れてゐる譯ですなね！」

編輯子の言葉に、わが「姓名の哲理」の著者は纔かに苦笑せられるのみでありました。

—この文字、音靈、數理そして運命學にスバラシイ單化智を持つてゐる今代稀有の熊崎先
 生から説示を受ける機會を得たことを讀者と共に喜びとするものであります。

▶上 獻 辛 鹽 山 數 比◀

私がまだ時事新報在社當時。福澤社長の姻戚關係なる外務大臣、故・林董伯を訪問する機会も頻頻たるものであつた。或日、葉山の別荘に例に依つてお邪魔すると、伯がニコニコしながら、突然に次のやうなことを申された。
「あなたは(ひえいさん・しおから・けんじやう)と正格に漢字で書き得るかな?」

そこで私は、それはどういふ意味かと訊ねたが――

「兎に角、書いて御覽!」

と、促されるまゝに(比叡山鹽辛獻上)と書いた。伯は呵呵大笑せられた。――後で聞くと、伯は長い間滞歐の外交官生活中、漢字に縁が遠くなるのを慮り、その畫數を常に思ひ出しては勉強されてゐたのだとのことであつた。

――(健翁百話より)――

第五 畫數篇 熊崎式標準新辭典

漢字の根本義

漢字は、單なる符牒的に構成せられたものでなく、遠くその源を探れば、支那上古に於ける天體觀測に端を發してゐるのであります。即ち悉くが恒久なる天則に基いて創造され、統制せられ來つたものであります。――日本の假名文字や西洋のアルファベットは、人間の發音を表示する爲に作られた音表文字でありますが、支那の文字は、音を表はす以外に、より深奥なる精神・靈意が織込まれてゐるのであります。即ち所謂説文の指事・象形・會意・諧聲・轉註・假借の六義を含蓄する所の意表文字であります。音表文字と雖、全然意義・精神を有しないとは言へませんが、意表文字は、その組成の根本義に於いて、既に天地自然の理法に則り、萬古不動の靈意を含む點に比し、強弱・深淺の差は同日に論すべきものでないであります。

之等に関し近代字源研究家として最も造詣深き學者・葛城理平氏が唱道せらるゝ前人未發の「午

「字説」に依り、私の前著に於いて既に述べた處であります。今日も尙ほ悟り得ざる向もある如く考へますから、此際重ねて今一度、筆に上すの要ありとするのであります。以下之が解釋を簡約的に述べて「熊崎式標準新辭典」の前書きと致します。——姓名學の原則に基いて改名或は撰名な爲し、よき名前を得る爲には、最も正確なる文字——字畫の嚴正を期さねばならぬ、素よりのことでありませう。が、その字畫算定の基本觀念たる字元なり由來なりを知らぬが如きは、體系的理信を第一義とする熊崎式姓名學の約束を破却するものでありますから、是非この點に深甚なる研究を重ね、より深き造詣と涵蓄とを把持されんことを希望するものであります。この意味に於いて多少難解でも一應讀了されるやう、特に注文を發して置くのであります。

文字創成原理

正午を記す「午字」は古文多種多様に涉りますがその字源は上古の天體觀測に發して居ります。上古の天體觀測は「周禮」「考工記」「周髀」「算註」等に據れば、先づ四方拓けたる丘上に於いて地面を水平にし、八尺の木柱を垂直に立てる。この木柱を「臬」と名付けます。臬を中心とし

て適宜の距離へ圓周線を描く。斯くて日出を俟つ。日の出と共に西方に當りて臬影を生ず、始めはその影餘りに長くして其の頂點を認むることが出来ないが、段々短くなるに伴れ、判然と頂上點を認むることが出来る——一度頂點が圓周線上に接する刹那に線上に一點を記す——之が「ㄣ」であります。

——臬影は漸次短くなり、その極度に達する時が正午であります。始めより正午を捉へることは不可能であります。次いで午後になり、臬影が漸次に長くなつて再び圓周上へ、影の頂が来た時また點を記す。斯様に記され二點を連絡した直線を引くと「ロ」形となる。この直線は正しく東西を畫する線であり、この一直線が「一」の字源と爲るのであります。次いで東西の直線を二等分した點と臬とを連ねた直線が南北の線。即ち正午の影の來るべき線であり、その位置の子午線であるべき筈であります。「ロ」を二等分して臬を結ぶと「中」形と爲り、即ち「中」字の字源を爲すのであります。

而して尙ほ天測の誤差なきを期する爲、夜間の測定をするのであります。夜間の測定方法は臬の頂上より糸を引き、晝間測定し置きし正南の地點（圓周上の）へ糸を直線にして、臬の頂

上を通じて北極星を視線上に導く。正南と假定した地點と泉と北極星との三點が、一直線上に入れば即ち正しい南北が定まる譯であり、上下垂直の「一」なる字源を爲すのであります。以上、天體觀測の方法は周代の方法でありますが、この方法は極めて古へより傳へられたものと見るべく、周が新都を奠めた時に、この泉を立て、大都市計畫の方針を決定し、その繩張りをするに僅か十四日間を以てしたことに依つても、古法を守つてその儘に實現したものであることが考へられます。

X

正しい東西南北が定まると、今度は正北の地點に、泉と相對して「弋」を立てる（弋は時を測る弋の意）この弋に依つて恒星（歳星）を測定し且つ四季の中星を測定します。斯様な方法に依つて夫れ夫れ官衙を配置し、市場を定め、道路を東西南北に通じ、棊盤の目の如く井字型を以て布き、之を郊外に及ぼして農田も亦同一型たらしめ以て都市計畫の大プランを設定するのであります。（田）「行」「井」等の字源）天子の宮室は其の中央即「泉」を中庭として亞字型に設くる（亞」の字源）。——天子南面して朝に立てば、方位自ら定まり居らにして天下を知る、と云ふは

この意味であります。

泉は毎日、時計の用を爲し、曆を定めて天子自ら之を諸侯に頒ち、民に農事を教へ、全範圍内の生産を確實豊穰ならしむるのであります。諸侯も亦、之に倣ひ各封地に於いて泉を立て、その日影の長短を計度してその土地の緯度を測り封域を定むる。故に支那上古の政治・道德・教育・學藝・法律・工業・農業・商業等、一に泉を大本として成らざるものなしと云ふ譯であります。

叙上の説により泉の圓周上に施したる目盛に、日影の指示する状態が、直に文字の源となることを見逃し難いのであります——

中央の垂直線は正午の影であり、その右の影は午前八時、左の影は午後四時に相當する。而して「午」字の古字は「一」であります。即ち「一」は天地の南北を縦斷し、北は北極を貫き、南は中星を貫く處の、無限の長さを有する子午線であつて以て天地の正道を象徴する一線であります。この一線を定むることに依つて、事實に天下を經緯し、四方を正し、七政を統べ、綱紀

を張り、皇天后土同時に定まり、民は生産に潤ひ、文教之によりて興るのであります。

前記の如く、泉の日影の一定點へ記した「一」と「一」との間を連絡したる東西を貫く一線は、横線「一」字の根元となり、地球に取つては正に赤道線を表徴する字源となり、上下に畫せる縦線は、南北を貫く子午線となり、以て茲に文字創生の経緯が完成します——盈數たる「十」は東西南北を示し、その交叉點に中央の位を表はし、大宇宙の全部を包含する十全——「盈つる」の意を生じ、之より出發して或は日影を記する點を加へ、或は午前八時、午後四時の影たる「八」の線を用ひて文字の左右を配し、若くは之等に象徴・顯現の靈意を盛り、六書の法則を基調として縦横・左右・上下に長短・疎密、幾變化の點・線を畫して數千の文字が構成せらるゝに至つたのであります。

文字が、左様に恒久的天測に基いて、創成されたことを悟了する時は、従つて文字が單なる符牒でなく、千古不磨の哲學的及科學的意義を含蓄せる根據も亦自から明瞭化されるのであります。

標準辭典凡例

より正しき字畫算定の事を述べましたが實際において正しき文字の使用といふことは困難なことであり、大學者大先生といはれる人でも往往にして誤字略字を正確なるものとして慣用し來れるものが決して尠くありません。斯くては折角の姓名學の原理も實際的應用に於いて其の眞價を發揮し得ないのみか、却て不良なる結果を招來することになりますから、特に應用者の便を計る爲め本字引を編纂して斯學の實際的活用に資することにしました。

採録せる文字數は二千八百二十四字で普通姓名に使用せらるゝ範圍は勿論、或は商店名、銀行會社名、或は船名、商品名、若くは雅號等に至る迄凡そあらゆる名稱に使用せらるべき一切の參考文字を蒐收しました。

採收の文字は主として康熙字典並に簡野道明氏著字源に準據し、其他の古書によつて字畫の嚴正を期し、以て「正字」「俗字」「偽字」「略字」等の區別を明かにし、更に我國にて造りし文字にして廣く世間に通用するものは「國字」として其意義、讀假名を附しました。

「俗字」並に「國字」は其儘の字畫數に依るも、「略字」「偽字」は正字の字畫數に據ること云ふまでもありません。字元を正し、古體を探るも實際に通用せざる文字は已に字靈を失ひ文字としての能動力を有せず、従つて古體と相違し字元と一致せざるものも實際に通用しつゝあるものは文字として生命を有するものなれば其字畫數を精査して掲げて置いた次第です。

字音は右側に漢音、左側に吳音を掲げ、兩音共通のものは單に一音丈を掲げました。

文字は六書の法則に依りて成立したものであることは前項字元の解説に述べた通りであり、従つて字畫算定も之に因ることは云ふ迄もありません。例へば「表」の字は一見八畫なる如きも、「表」は「上衣」の意にて上の三畫と「衣」の六畫とで九畫に屬するが如く、或は「養」は十四畫に計算され易きも、養の義は元と羊を食ふに在り十五畫を以て正とするが如きであります。又酒は、酉に屬して水扁にあらず、染は木に従ひて同じく水を以て計算することは出来ません、初は刀の部に屬し衣扁にあらず。泰は水に屬して九畫となり、その他字畫算定に正確を期する爲には、その字の部所に就いての検討を経なくてはなりません（圖示参照）

養 羊+食 15	酒 3+7 10	崎 山+9 12	欒 木+18 22	驢 馬+17 27
表 衣=表 9	淵 4+8 12	崎 山+8 11	舉 臼+10 17	異 田+7 12
染 木+9 9	龜 16	玲 王+5 10	舊 臼+12 18	冀 八+10 16
陽 17	初 刀+5 7	紙 7+4 11	海 每	拜 拜
艷 14	泰 5+水 9	兔 8	每 4+7 11	拜 4+5 9

〔行〕 ゆきがまへ	〔七〕 七畫	〔角〕 つのへん	〔言〕 ごんべん	〔豆〕 まめへん	〔豕〕 みのかへん	〔豸〕 むじなへん	〔貝〕 かひへん	〔走〕 こがひ	〔足〕 そらにう	〔身〕 あしへん	〔車〕 くるまへん
〔疋〕 よしんちう	〔邑〕 おほざと	〔酉〕 とりへん	〔采〕 のこめへん	〔里〕 さとへん	〔八〕 八畫	〔金〕 かねへん	〔門〕 もんがまへ	〔阜〕 かどがまへ	〔隹〕 ふるとり	〔九〕 九畫	〔雨〕 あめかんむり
〔革〕 かはへん	〔韋〕 なめしがは	〔頁〕 おほがひ	〔食〕 しよくへん	〔十〕 十畫	〔馬〕 うまへん	〔骨〕 ほねへん	〔鬃〕 かみかんむり	〔鬲〕 かみがしら	〔鬼〕 とうがまへ	〔十一〕 十一畫	〔鬼〕 きにな
〔魚〕 うをへん	〔鳥〕 とりへん	〔麥〕 ばくにちう	〔麻〕 あさかんむり	〔十四〕 十四畫	〔鼻〕 はなへん	〔十五〕 十五畫	〔齒〕 はへん				

熊崎式標準新辭典

(五聖閣「原本」鈔)

〔一〕 ひとつ、かず、はじめ、まこと、しるし。	〔二〕 きのと、をばり、とまると、かまると、まると、すゝむ。	〔三〕 右戻なり。	〔四〕 左戻なり。	〔一畫之部〕			
〔三〕 ふたつ、ふたたび、ひと、と、にんげん、ひとがら、つとむ。	〔力〕 また、さらだ、ふたたび。	〔又〕 すなはち、わづか、の、なんぢ、それがし。	〔乃〕 いる、すゝむ、うく、ひたす。	〔入〕 さじり。	〔七〕 おしまづき、つくろ、やすし。	〔凡〕 おしまづき、つくろ、やすし。	
〔了〕 きとる、さだまき、ついに、あきらか。	〔刀〕 かたな、はもの。	〔下〕 うらなひ、あたふ。	〔三〕 みつ、み、みたび、かす、みたび、たび、しは、しは、さう。	〔万〕 よろづ、あまた、かす。	〔久〕 ひさし、ながし、とほし、とどまると、ふさぐ。	〔于〕 ここに、おほいなゆく、おほいな	
〔刃〕 やいば、きる。	〔口〕 くち、ほとり、はじめ。	〔夕〕 ゆふ、ゆふべ、よる。	〔山〕 こ、こども、たね、ね、十二支の第一位。	〔己〕 やま。	〔下〕 おのれ、つちのむ、われ、をさした、しも、ほし、りへ、すそ、ほし。	〔个〕 ひさし。	
〔乞〕 こひ、こひ、ねがひ、こじき。	〔亡〕 ほろぶ、らしなふ、ない、のがる。	〔千〕 ち、ちたび、かす、ちまた。	〔土〕 つち、どろ、り、はかる。	〔大〕 おほいなり、ひろふ、とし。	〔寸〕 すこし、はかる、す、ちか。	〔川〕 かは。	〔己〕 すでに、のみ、これ、やむ。

熊崎式標準新辭典 (一畫) (二畫) (三畫)

〔舌〕 ちにしへ、 ふるし。	〔可〕 べし、よし、 ばかり、ほど。	〔占〕 うらない、うか がふ、しむ。	〔包〕 つむ、つと、 ふくむ、はらご もり。	〔出〕 いづ、でる、は なる、あらはる はく、で。	〔兄〕 あに、かみ、え、 おそる、くらぶ。	〔代〕 よ、かはる、 しろ、ねだん。	〔仕〕 つかふ、まなぶ、 いたす、あきら か。	〔井〕 み、あど、 どんぶり。	〔丕〕 おほいなり、は じめ、もと、う く。
〔司〕 つかさ、 うかがふ。	〔旬〕 あたる、 くぎり。	〔卯〕 十二支の第四位 をかす。	〔北〕 きた、そむく、 にぐる、まける。	〔加〕 くはふ、 ますます。	〔充〕 みつ、ふさがる、 かす、あつ、た かす。	〔仗〕 つはもの、つあ、 よる、たのむ。	〔仙〕 せん、にん、ひじ り、うつる。	〔以〕 もて、もちて、 おもふ、ひきる る。	〔丙〕 ひのえ、 あきらか。
〔正〕 ただし、まじし、 あきら。	〔未〕 すえ、こすえ、 はし、つひに。	〔扎〕 ぬく、 ふだ。	〔弗〕 す、あらず、 いな。	〔幼〕 こども、 わかし。	〔市〕 うち、 うりかひ。	〔巧〕 わざ、 たくみ。	〔夨〕 木とは別字、 おもむく。	〔召〕 めす、よぶ、 まねく。	〔史〕 ふびと、ふみ、 あや。
〔母〕 は。	〔未〕 ひつじ、いまだ、 あらず、十二支 第八位。	〔旦〕 あした、 あかつき。	〔必〕 かならず、 もつばら。	〔弁〕 かんむり、 いそぐ。	〔布〕 ぬの、 し。	〔巨〕 大なり、おほ し、なに。	〔尻〕 しり、 そこ。	〔外〕 と、ほか、 はづす。	〔只〕 ただ、 これのみ。
〔民〕 たみ。	〔本〕 もと、はじめ、 たづねる。	〔札〕 ふだ、 てがみ。	〔戊〕 つちのえ、 しげる。	〔弘〕 ひろし、 大なり。	〔平〕 おさむ、 おさむ。	〔左〕 ひだり、たすく、 すけし、うこ、 くだす。	〔尼〕 あま、 むつぶ。	〔央〕 なかば、 ひさし。	〔台〕 臺の略字に非ず 敬語。

〔玄〕 もくろ、そら、 もと、くらし。	〔立〕 たつ、とどまる、 おく。	〔示〕 しめす、さしづ、 あらはす。	〔予〕 ほこ、 まゆみ。	〔皮〕 かは、おほひ、 うはべ。	〔申〕 さる、のぶ、か さね、十二支の 第九位。	〔田〕 た、くろ。	〔甘〕 あまし、うまし、 あまんず。	〔王〕 きみ、をさ、か しらす、さかん。 (四畫なり)	〔永〕 なが、ながし、 とほし、はるか。	
〔用〕 もちふる、つか ふ、いさを、も つて。	〔瓦〕 かはら。	〔玉〕 たま、 ぎよく。	〔禾〕 いね、なへ、わ ら。	〔矢〕 や、つらぬ、ち かひ。	〔皿〕 さら。	〔疋〕 あし、ただし、 脚音ひき。	〔由〕 よる、ふ、わけ、 なほ、よし。	〔生〕 うむ、おふ、は ゆ、いき、い、 なま。	〔瓜〕 うり、 ひさご。	
〔伎〕 わざ、うでまへ、 のぶ、はたらき。	〔价〕 おほいなり。	〔亘〕 もとむ、わたる、 しく、のぶ。	〔六〕 むつ、むたび、 易の陰交。	六畫之部		〔穴〕 あな、うつろ、 いはや。	〔石〕 いし、おもり。	〔目〕 め、みる、 すぢめ。	〔白〕 しろ、あきらか、 まらす。	〔甲〕 きのえ、かし ら、はじめ、よ るひ。
〔休〕 やすむ、いこふ、 大なり、よし。	〔伉〕 つれあい、たぐ こやか。	〔交〕 まじはる、かは す、ともに、よ しみ。	〔丞〕 たすけ、たすく、 すむ、すけ。	〔劦〕 力をあはす。	〔冲〕 やばらぐ、 のぼる。	〔全〕 まつたし、そな ふ、すべし、る。	〔光〕 ひかり、かがや てる、大なり、 てる、みつ。	〔伏〕 ふす、かくす、 よる。	〔伍〕 いつ、くみ、 なかま、まじは る。	
〔仰〕 あふぐ、おほせ、 たのむ、たかし。	〔企〕 くはたつ、 つまだつ。	〔伊〕 これ、かれ、 ただ。	〔互〕 きはまる、つら なる、とほる、 ひろさ、わたる。	〔劣〕 おとろ、よわし、 わづか、つたな し。	〔刑〕 のり、のつと る、つね、しお き。	〔共〕 とも、みな、あ する、こまねく。	〔先〕 さき、はじめ、 さきがけ。	〔仔〕 うつくし、 うるはし。	〔任〕 あたる、たふ、 まこと、おふ。	

〔名〕 な。	〔后〕 きみ、きさき、のち。	〔合〕 あふ、あはず、おなじ。	〔匠〕 たぐみ、だいく、もくろみ。	〔匡〕 すくよ、まさ、すくよ。	〔列〕 わかつ、ならぶ、ならび、くみ。	〔再〕 かまたび、かさね。	〔兆〕 うらない、きざし、おほい。	〔兇〕 あし、おそる、あらし。	〔伸〕 なが、つぎ、おとらと。
〔吏〕 つかさど、なま。	〔吐〕 はく。	〔吉〕 よし、さいはひ、めでたし。	〔印〕 しるし。	〔寺〕 てら。	〔宇〕 のき、大い世、いへ。	〔字〕 もじ、うむ、しげし。	〔好〕 よし、このむ、よしみ。	〔地〕 つち、くが、くじ、した。	〔回〕 めぐる、まはる、かへす。
〔因〕 よる、なむ。	〔同〕 おなじ、ひとし、なま。	〔向〕 むかふ、むく、おもむく。	〔各〕 おのおの、それぞれ。	〔屹〕 そばたつ、たかし。	〔守〕 まもる、かみ、をさむ。	〔存〕 あり、おへる、たもつ。	〔如〕 ごとし、ゆく、しく、もし。	〔夙〕 つと、あした、ふるし。	〔圭〕 いさま、かど、いさまよし。
〔旭〕 あさひ、あきらか。	〔戎〕 つはもの、大なり、そなへ。	〔式〕 のり、おきて、はかる。	〔帆〕 ほ。	〔州〕 くに。	〔宅〕 すまひ、さだむ。	〔安〕 やすし、しづか。	〔妃〕 つれあい、きさき。	〔多〕 おほし、いさを。	〔在〕 あり、あます、あきらか。
〔早〕 はや、すみやか、つとに。	〔打〕 うつ、うち、たたく。	〔戌〕 とどむ。	〔年〕 とし、よはひ。	〔牟〕 うぼら、むさぼる。	〔灰〕 はひ。	〔死〕 しね、つきる、ころす。	〔朶〕 朶に同じ、えだ、しだれる。	〔有〕 ある、あり、うとる。	〔旬〕 とほか、ひとし、みつ。

〔旨〕 あつむ、よし、うまし。	〔收〕 あつむ。	〔戌〕 いぬ、十二支の第十一位。	〔庄〕 國書シヤウ、大化。ひらか、莊の誤。	〔百〕 もも、ひやく、おもしろ。	〔灯〕 はげしき火、(燈と異なる)。	〔求〕 もとむ、たづぬ、ねがふ。	〔次〕 つぎ、つぎ、ついで、たび、つしよ。	〔机〕 つくえ。	〔曳〕 ひく、よせる。
〔肉〕 み、にく、しし、からだ。	〔考〕 かんがふ、しらぶ、ながいき。	〔羊〕 ひつじ。	〔竹〕 たけ。	〔礼〕 禮(十八畫の古字)。	〔牝〕 め、めす。	〔汀〕 きざし、みぎは。	〔此〕 これ、ここ。	〔朱〕 あか、あけ。	〔曲〕 まげる、かがまふ、よこしま。
〔良〕 よし、うしとら、馬の「山」。	〔白〕 うす。	〔臣〕 けらい。	〔而〕 なんぢ、して、ち、みづから。	〔羽〕 は、はね。	〔米〕 よめ、よめ。	〔衣〕 きぬ、ころも。	〔虫〕 まむし、俗に蟲の略字。	〔舟〕 ふね。	〔至〕 いたる、ゆき、およぶ、わね。
〔亥〕 み、十二支の第十二位。	〔行〕 ゆく、ゆき、かへる、みち、つら。	〔色〕 いろ、きざし、けしき、つや。	〔舌〕 した、ことば。	〔自〕 おのれ、よりのち、おのづから。	〔耳〕 みみ、のみ。	〔老〕 ゆお、としよ、り、たける。	〔糸〕 いと、かす(絲の俗字)。	〔西〕 にし。	〔血〕 ち、のり、そむ。
〔伴〕 とも、ともがら、つれ、ともなふ。	〔低〕 ひくし、うなだる。	〔伺〕 うかがふ、まつ。	〔估〕 あたひ、みつぎ。	〔佑〕 たすけ、すけ、たすけ。	〔些〕 すこし、いささか。	〔況〕 ここに。	〔串〕 くし、うがつ、つらぬく。	〔七〕 ななつ、ななたび。	七畫之部

佛 <small>フツ</small>	佃 <small>ヂン</small>	伸 <small>シン</small>	佐 <small>サ</small>	佚 <small>イツ</small>	亨 <small>ヤウ</small>	初 <small>ショ</small>	兵 <small>ヘイ</small>	兌 <small>ダイ</small>	余 <small>ヨ</small>
ほとけ、さとり、 さまにたり。	つくだ、 たつくる。	のぶ、なほす、 せのび。	たすく、すけ、 すすむ。	やすし、たのし うむ、なまける、 うつくし。	とほる、 すすむ。	はつ、はじめ、 もと、まへかた。	つはもの、あ た、いくさ。	とほる、よろこ ぶ、あつまる。	われ、み、 あまる。
体 <small>ホン</small>	伯 <small>ハク</small>	住 <small>ジュ</small>	作 <small>サク</small>	何 <small>カ</small>	位 <small>イ</small>	判 <small>ハン</small>	冶 <small>ヤ</small>	兎 <small>ト</small>	伶 <small>レイ</small>
おとろ、あらし、 俗に體の略字を 用ゆるは誤りな り。	をさ、 かしら。	すむ、やむ、と ままる。	つくろ、なす、 おこす、はたら く。	なに、なんぞ、 いづれ、いくば く。	ばからみ、ところ、 ばかり。	わかる、さだむ、 さばく、つかさ。	いる、とかす、 なまめかし。	八畫「兎」の俗 字。	ひとり、もてあ い、小さかし。
均 <small>クワン</small>	呂 <small>リョ</small>	吹 <small>スイ</small>	君 <small>クン</small>	努 <small>ド</small>	利 <small>リ</small>	別 <small>ベツ</small>	冷 <small>レイ</small>	免 <small>ベン</small>	克 <small>コク</small>
ひとし、たひら か、まさ、あま ねし、はかる。	せげね、 陰の音律。	ふく、たすく、 はやし。	きみ、 たつとし。	つとむ、 はげむ。	とし、よし、 まろけ、ちから。	わかつ、はなる、 よそ、ほか。	ひややか、すす し、さげしむ。	まぬかる、の が、ゆるる、う が。	かつ、あたふ、 しのぐ、よく。
坐 <small>ザ</small>	国 <small>コク</small>	呈 <small>テイ</small>	吾 <small>ゴ</small>	告 <small>コウ</small>	劫 <small>ケツ</small>	局 <small>キョク</small>	宏 <small>カウ</small>	妓 <small>キ</small>	坂 <small>ハン</small>
すわる、 みながら。	くに、 國の俗字。	あらはる、しめ す、すむ。	われ、 ふせ。	つぐ、かたる、 をしゆ、こふ。	かすめとる、 おびやかす。	わかづ、 わかづ。	ひろし、 大いなり。	あそびめ、 うたひめ。	さか、 どて。
坊 <small>ハウ</small>	坑 <small>カウ</small>	吞 <small>トン</small>	吳 <small>ゴ</small>	吟 <small>イン</small>	助 <small>ジュ</small>	尾 <small>ビ</small>	完 <small>クワン</small>	妙 <small>ミョウ</small>	壯 <small>サウ</small>
まちへや、 僧形の人。	あな、 たに。	のむ、 あはせつむ。	大いなり、ひろ、 おもんばかる。	うたふ、うめく、 うそぶく。	たすく、 ます。	を、 うしろ。	まつたし、 たもつ。	たへ、 わかし。	さかん、つよし、 大いなり。

忙 <small>マウ</small>	忍 <small>ニン</small>	形 <small>ケイ</small>	廷 <small>テイ</small>	床 <small>シュウ</small>	岑 <small>シン</small>	岐 <small>キ</small>	宋 <small>ソウ</small>	孝 <small>コウ</small>	声 <small>セイ</small>
いそがし。	しのぶ、たふ、 ゆるす。	かた、かたち、 すがた。	なほし、 ただし。	牀の俗字、 ゆか、ねや。	けはし、 けはし。	ふたまた、わか る(八畫)字に 同じ)	居る。	たかし。	聲(十七畫)の 俗字。
我 <small>ガ</small>	忖 <small>ソン</small>	役 <small>エキ</small>	弄 <small>ロウ</small>	序 <small>ジョ</small>	巫 <small>フ</small>	杏 <small>キョウ</small>	旱 <small>カン</small>	改 <small>カイ</small>	成 <small>セイ</small>
われ。	はかる、 おもふ。	つかふ、つかさ、 まもる。	もてあそぶ、 あなどる、 たはむる。	のぶ、 のぶ。	みこ。	あんず。	ひでり。	あらむ、 かふ、かはる。	なる、をはる、 さかん。
戒 <small>カイ</small>	忘 <small>バウ</small>	志 <small>シ</small>	弟 <small>テイ</small>	延 <small>エン</small>	希 <small>キ</small>	材 <small>サイ</small>	更 <small>カウ</small>	攻 <small>コウ</small>	托 <small>タク</small>
そなへ、 そなへ。	わする、 おとす。	このろざし、 しるし。	おとうと、 したがふ。	ひく、のぶる、 およぶ。	まれ、すくなし のそむ。	ざいもく、はか る、たから。	さふ、かはる、 さら、あらた まる。	おむ、 おかす。	ひらく、 たのむ。
灸 <small>キウ</small>	汐 <small>セキ</small>	江 <small>カウ</small>	柚 <small>ユ</small>	杜 <small>ト</small>	束 <small>ソウ</small>	杉 <small>サン</small>	杆 <small>カン</small>	孝 <small>コウ</small>	攸 <small>イ</small>
やいと、 やいと。	ゆふしほ。	いりえ。	(木、きこり、 國字)	あまなし、 ふさぐ。	たばね、 くぐる、 ちぎる。	すぎ。	たて、 てこほう。	俗(十六畫)の 俗字。	ところ、 大きい。
玎 <small>テイ</small>	池 <small>チ</small>	汗 <small>カン</small>	步 <small>ホ</small>	呆 <small>バイ</small>	村 <small>ソン</small>	言 <small>ゲン</small>	良 <small>リョウ</small>	秀 <small>シウ</small>	男 <small>ナン</small>
玉の聲の形聲。	いけ。	あせ。	あゆむ、つば、 はかる。	あきれる。	さと。	こと、ことば、 いよ。	よし、うつくし まこと、よかし。	ひいづ、さかゆ ひで、しげる、 よし。	を、とこ、 むすこ。

〔町〕 まち、あぜ。 田のあぜ。	〔秃〕 はげ、かむろ。	〔見〕 みる、あらはす。 まみゆ。	〔谷〕 たに、やしなふ、 きはまる。	〔杖〕 よる。	〔季〕 すもも。	〔每〕 つね、ごとく、 おのおの。	〔汝〕 そなた。	〔汎〕 ひろし。	〔甫〕 はじめ、 おほい、 大いなり。	
〔私〕 わたくし、ひそ か、よこしま。	〔究〕 きはむ、たづぬ、 はかる。	〔角〕 つの、かど、す	〔豆〕 まめ。	〔貝〕 かひ、かざる、 たから。	〔身〕 み、からだ、わ	〔邑〕 むら、みやこ、 くた。	〔赤〕 あか、まごころ はだか。	〔車〕 くるま。	〔酉〕 とり、なる、み のり、十二支の 第十位。	
〔足〕 あし、 あゆむ。	〔辰〕 たつ(十二支の 第五位)ひ又は とき。	〔里〕 さと、 みちのり。	八畫之部		〔八〕 やつ、わかつ。	〔事〕 こと、しわざ、 いとなむ、いさ	〔依〕 よる、たすく、 たとへ。	〔俊〕 みやよし、すこ やか、まじはる。	〔供〕 そなふ、ささぐ まうく、たす。	〔侈〕 おごり、おほい まま、おほいな り、ゆたか。
〔並〕 ならぶ、みな、と もに、つらなる 並(十一畫)俗字	〔享〕 すすむ、もてな す、やしなふ、 さかもり。	〔侑〕 たすく、すすむ、 むくゆ。	〔侃〕 つよし、なほし、 なを、ただ、和 らぎ樂しむ貌。	〔侍〕 さむらひ。	〔佻〕 かろし、うすし、 のぼす。	〔乳〕 ちち、ちぶさ、 やしなふ、そだ	〔京〕 みやこ、 をか。	〔佳〕 よし、うつくし、 むめよし、この	〔佳〕 すこやか、さか んなり、ただし。	〔倍〕 ふたばい。
〔使〕 つかひ、つかよ、 用ゆる。	〔佩〕 おぶ。	〔來〕 きたる、いたる、 このかた。	〔兔〕 うさぎ。	〔具〕 そなへ、ともだ、 ことごとく。	〔冽〕 さむし、はげし、 いさぎよし。	〔刷〕 はけ。	〔制〕 つくる、たし、 おきて、さばく。	〔協〕 かなふ、あはす、 やわらぐ。	〔卦〕 うらかた。	

〔受〕 うけつ。	〔周〕 めぐる、ひろし、 そなはる。	〔例〕 おほむね、 おほむね。	〔兩〕 ふたつ、ふたた らび、たぐひ、な	〔典〕 つね、みち、の	〔函〕 はこ、いるる、 つむ。	〔刹〕 てはしら、	〔到〕 いたる、 およぶ。	〔卒〕 つしまべ、 つしまの。	〔卷〕 まき、 まく。
〔叔〕 すぢ、 すぢ。	〔味〕 あじ、 わけ。	〔兒〕 こ、をさなし、 よわし。	〔其〕 その、物を指す	〔冒〕 九畫目の俗字。	〔刻〕 きざむ、ちりば む、けづる、時 の度。	〔刺〕 ぬす、 ぬひとり。	〔効〕 字(十畫)の俗	〔卓〕 たかし、こゆ、 すげれる。	〔取〕 おさむ、 おさむ。
〔和〕 やわらぐ、むつ やまと。	〔命〕 つかふ、おほせ、 もうしつけ。	〔固〕 かたし、 もと。	〔坦〕 たひらか、 ひろし。	〔夜〕 よ、よる、 よふけ。	〔奉〕 たてまつる、 ささぐ。	〔姉〕 あね。	〔妾〕 めかけ、 そばめ。	〔孤〕 ひとり、 そむく。	〔官〕 つかさ、 つかさ。
〔定〕 さだむ、 ただし。	〔居〕 ゐる。	〔坤〕 つち、くが、し たがふ。(一畫)	〔坡〕 さか、 つつみ。	〔奇〕 めづらし、 めづらし。	〔姑〕 しうとめ、 しばら。	〔姓〕 かばね、 うぢ。	〔妹〕 いもうと、 いも。	〔孟〕 をき、かしら、 つとむ、大い出。	〔宗〕 むね、はじめ、 をき、のつとる。
〔宕〕 いば。	〔岡〕 をか、 やまのせ。	〔垂〕 たる、ほとり、 なんなんとす。	〔坪〕 つば、 たいら。	〔奈〕 な、なに、 いかに。	〔始〕 はじめ、 もと。	〔妻〕 つま、 めめはす。	〔季〕 ゝ、とき、 わかし。	〔宜〕 よし、 むべ。	〔宙〕 あめ、 あめ。

念 <small>ネン</small>	快 <small>クワイ</small>	徂 <small>ソ</small>	弩 <small>ノ</small>	店 <small>テン</small>	幸 <small>カク</small>	帖 <small>テフ</small>	岸 <small>ガン</small>	岳 <small>ガク</small>	尙 <small>シヤウ</small>
おもふ、となふる。	こころよし、さわやか。	ゆく、ぬらふ。	いしゆみ、いかる。	みせ、たな。	さひはひ、よしゆき、さち、よしみ。	かきもの、てがみ。	かぎり。	嶽(十七畫)の古字。	なほ、ひき、あがむ。
或 <small>ワク</small>	忽 <small>コツ</small>	彼 <small>ヒ</small>	弥 <small>ヒ</small>	府 <small>フ</small>	庚 <small>カウ</small>	帑 <small>トウ</small>	岩 <small>ガン</small>	承 <small>ショウ</small>	所 <small>ショ</small>
あるひは、もしくは。	たちまち、わする、あなどる。	かれ、こ。	略(十七畫)の略字。	くら、かくしよ、あつまる。	かのえ、かはる。	かねぐら。	巖(二十三畫)の俗字。	うく、たすく、ささぐ。	ところ、ほど。
蔑 <small>ゼン</small>	忠 <small>チュウ</small>	往 <small>ワウ</small>	征 <small>セイ</small>	弦 <small>ゲン</small>	底 <small>テイ</small>	帛 <small>ハク</small>	岱 <small>タイ</small>	折 <small>セツ</small>	房 <small>ハウ</small>
そこなふ。	まこと、まめや、か、ただし。	ゆく、いぬ、のち。	ゆく、うつ。	ゆづる、ゆづる。	そこ、した。	きぬ、にしき。	泰山の意。	をる、まげる。	いへ、す、いへ。
松 <small>ショウ</small>	果 <small>クワ</small>	服 <small>フク</small>	旻 <small>ミン</small>	昌 <small>シヤウ</small>	昂 <small>カウ</small>	斧 <small>フ</small>	政 <small>セイ</small>	扶 <small>フ</small>	技 <small>ギ</small>
まつ。	くだもの、むくひに、はたす、つく。	きもの、つとめ、もちゆ、えらび。	そら、秋の空、あはれむ。	さかん、よし、まさ、あたる。	あがる、たかし、あふぐ。	おの、よぎ。	まつりごと、ただし、まさ、まきに、みつき。	たすく、まもる、よる。	わざ、たくみ、わさ。
柎 <small>チ</small>	枝 <small>シ</small>	朋 <small>ホウ</small>	明 <small>メイ</small>	昇 <small>ショウ</small>	昏 <small>コン</small>	於 <small>オ</small>	放 <small>ハウ</small>	板 <small>ハン</small>	杷 <small>ハ</small>
てかせ、もちの木。	えだ、ふし、わかる。	とも、なかま、たぐひ。	あきらか、あすは、じめ、たふと、し、とほる。	のぼる、あがる、あぐ。	くらし、みだる、おろか。	あ、にて、より。	ちんぷ、ちらす。	いた。	え、つか、さらふ。

東 <small>トウ</small>	杵 <small>シ</small>	杭 <small>カウ</small>	旺 <small>ワウ</small>	昔 <small>セキ</small>	昆 <small>コン</small>	易 <small>エキ</small>	齊 <small>セイ</small>	林 <small>リン</small>	杯 <small>ハイ</small>
あひがし、あづま。	きね、たて、きねた。	くひ。	ひかり、うるはし。	むかし、ひさし、きのふ。	あち、あと。	かふ、うらない、はぶく。	齊(十四畫)の略字。	おほし、おほし。	さかづき。
知 <small>チ</small>	的 <small>テキ</small>	牧 <small>ボク</small>	炊 <small>スイ</small>	沃 <small>ボク</small>	沖 <small>チウ</small>	決 <small>ケツ</small>	歧 <small>キ</small>	欣 <small>シン</small>	枚 <small>マイ</small>
ともし、さとし、ともし。	ま、あきらか、かなめ。	まき、まきば、おさむ。	かしぐ、にる。	そせ、やはらぐ。	やはらぐ、ふか、るとびあが	さく、ひらく、さる、きめる。	えだみち、七畫の岐に通ず。ふたまた。	よろこぶ。	みき、もと、かす。
祀 <small>シ</small>	直 <small>チウ</small>	狃 <small>チウ</small>	版 <small>ハン</small>	汪 <small>ワウ</small>	沛 <small>ハイ</small>	沙 <small>シャ</small>	武 <small>ブ</small>	糾 <small>キウ</small>	穹 <small>キウ</small>
まつる。	なほし、すなほ、ただし。	なるる。	ふだ、いた、そむく。	水濺き貌、大いなり。	さば、はやし、すみやか。	みぎは。	たけし、きよし、いさむ、いくさ。	ただす、をさむ。	たかし、大いなり、そらあめ。
社 <small>シャ</small>	盲 <small>マウ</small>	玖 <small>ク</small>	物 <small>ブツ</small>	炎 <small>エン</small>	沐 <small>ボク</small>	汰 <small>タイ</small>	汲 <small>キツ</small>	肌 <small>ハダ</small>	空 <small>クウ</small>
やしろ、まつり、くにつかみ。	めくら、くら。	玉に次ぐ黒色の寶石。	もの、こと、たぐひ。	あゆ、し。	かみあらふ、うるほふ。	きたをする。	いく。	はだ。	そら、むなし、うろ、ひろし、大いなり。
青 <small>セイ</small>	門 <small>モン</small>	采 <small>サイ</small>	舍 <small>シャ</small>	雨 <small>ウ</small>	長 <small>チヤウ</small>	亓 <small>キ</small>	臥 <small>ゴ</small>	肋 <small>ロク</small>	竺 <small>チク</small>
あを、しげる。	かど、いりくち、みうち。	とる、えらぶ、あや、いろどり。	やど、やしき、すつ、やむ。	あめ、ふる。	ながし、ひさし、おさ、おとな、さかん。	國字すべる。	ふす、ねる、いこふ。	あばらほね。	たけ、じく。

〔亭〕 とどまら、はた ごや、あづまや、 しゆくば。	〔俗〕 いならはし、 いやし。	〔信〕 まこと、あきら か、おとづれ。	〔俠〕 たもとたて、 たもつ。	〔佞〕 いままし。	〔九〕 このつ、きは む、ひさし。	九畫之部	〔阜〕 くが、たか、あ つし、大いなり。	〔金〕 かね、 かね。	〔虎〕 とら。
〔侶〕 とも、つれ、 たぐひ。	〔便〕 たより、やすし、 はちがふ、すな	〔促〕 せまる、うなが す、はやし。	〔侵〕 をかす、 やぶる。	〔係〕 つかる、しはる、 つなぐ、ひく。	〔亮〕 まこと、すけ、 あきらか。	〔保〕 たもつ、まもる、 たすく、もり、 やす。	〔俊〕 とし、すける、 ひいず、たかし。	〔侯〕 むかひ。	〔俄〕 にはか、すま か、たちま。
〔佛〕 おほかげ、 すがた。	〔奎〕 股ぐら、 單宿の名。	〔垣〕 かき、 たすけ。	〔咲〕 わさく、 わらふ。	〔威〕 すみな、あまねし、 すみやか。	〔厚〕 あつし、 大いなり。	〔勃〕 にはか、 おこる。	〔勁〕 つよし、すこ か、するどし。	〔削〕 けづる、きざむ、 のぞく、さか。	〔冒〕 をかす、おほ ふ、むさぼる。
〔俞〕 やすし、やはら が、いよいよ。	〔契〕 ちぎる、 むすぶ。	〔垠〕 かぎる、 はて。	〔品〕 はしな、もろもろ、 はかる。	〔哄〕 ときのこと、 おほこえ。	〔叙〕 俗字(十一畫)の	〔勇〕 いままし、たけ しい、するどし、 つよし。	〔勅〕 みこと、のり、 いましめ。	〔前〕 まへ、さき、あ らかじめ。	〔冠〕 かんむり、 とさか。
〔威〕 おたけし、 おそる。	〔奏〕 申上ける、 すすむ。	〔型〕 かた、いがた、 のり、てほん。	〔圀〕 國の古字。	〔哉〕 かな、や、 はじむ。	〔罍〕 おどろく、 つぼ。	〔南〕 みなみ、 みなみす。	〔勉〕 つとむ、 はげむ。	〔則〕 のり、てほん、 すなはち。	〔剋〕 かつ、 あたふ。

〔姻〕 ちんぐみ、 ちなみ。	〔怜〕 さとし、かしこ し、あきらか。	〔急〕 いそぐ、 はやし。	〔待〕 まつ、 もてなす。	〔建〕 たつ、もうく、 はじむ。	〔幽〕 かくる、かすか、 くらし。	〔峙〕 とうげ、 國字なり。	〔宣〕 のぶ、 しく。	〔姥〕 うば、 うば。	〔姜〕 人の姓。
〔姬〕 めかき、 めかけ。	〔招〕 まねく、 よぶ。	〔思〕 おもひ、 かんがへ。	〔律〕 てうし、のり、 め、つね、いまし	〔彦〕 ひこ、すぐれた る男。	〔度〕 はかり、ほど、 はかる。	〔巷〕 ちまた、 ろじ。	〔屋〕 すまひ、 すまひ。	〔客〕 まろうど、 たびびと。	〔妍〕 うつくし、 みがく。
〔折〕 やぶらぐ、 やぶる。	〔拓〕 ひろし、 ひろげる。	〔性〕 さが、うまれつ き、こころ。	〔怡〕 よろこぶ、 やはらぐ。	〔後〕 のち、 うしろ。	〔廻〕 かへる、 かへる。	〔帝〕 みかど、 きみ。	〔峙〕 そばだつ、そば ゆ、そなふ。	〔室〕 むろ、 むろ。	〔姿〕 すがた、 なり。
〔拜〕 おがむ、 おじぎ。	〔終〕 さいご、 さいご。	〔柵〕 やせがき、 ませがき。	〔枯〕 かる、 おとろへる。	〔枌〕 つゑ。	〔柚〕 ゆず。	〔星〕 ほし。	〔是〕 ただし、なほし、 ここに。	〔施〕 ほどこす、しく、 まうく、わかつ。	〔拍〕 うたつ、 たた。
〔抱〕 だく、 もつ。	〔染〕 そむ、しむ、 けかす。	〔柔〕 やさし、 やさし。	〔查〕 いかだ、 しらべる。	〔柑〕 みかん。	〔架〕 たな、 かけ。	〔昭〕 あきらか、あき ら、みる、てる、	〔昶〕 日なが、ひさし、 のぶ。	〔映〕 うつる、てる、 はゆ、ひかけ。	〔拇〕 おほゆび。

【柱】 チユウ はしら、 さきふ。	【栢】 タク ひやうしぎ。	【柘】 シヤ やまやま。	【柴】 サイ しば、ふまぎ、 まもる。	【枸】 コウ からたち。	【柯】 カ え、えだ。	【味】 バイ をかし。	【春】 シュン よはる、 よはひ。	【昨】 サク きのふ、 さきの。	【故】 コ ふるし、ことさ ら、むかし。
【柏】 ハク かしは、 せまる。	【狐】 コ きつね。	【炫】 ケン ひかがやく、 ひかる。	【法】 ハフ のり、おきて、 つね。	【波】 ハ なみ、うてく。	【泉】 セン と、み、みなる	【況】 キヤウ たとふ、まして たふ。	【泳】 エイ およぐ。	【榜】 ボウ 國字とち。	【柳】 リウ やなぎ。
【柄】 ヘイ もえ、 もと。	【狗】 コウ いぬ。	【炭】 タン すみ。	【冷】 レイ 清く涼しき貌。	【泡】 ハウ あわ、うたかた さかん。	【泰】 タイ ひろし、ゆたか とほろ、大いなか り、やすし。	【注】 シュ つと、しるす	【沿】 エン そよ、よる。	【段】 ダン だんだん、わかっ	【榭】 シャ 國字とが、 つが。
【玩】 ワン もてあそぶ、 なれる。	【狛】 コウ こま。	【炳】 ヘイ あきらか、 いちじるし。	【炬】 キョ かがりび、 たいまつ。	【泊】 ハク とまり、 しづか。	【治】 チ をさむ、いさを みち、はる。	【沼】 セウ ぬま、いけ。	【河】 カ かは。	【油】 ユウ あぶら。	【枉】 ワン 國字まき、 まぎれ。
【烟】 エン 國字はた。	【甚】 ジン しるす、のり、 とし、もと、す ぢ。	【紀】 キ はなはだ、ふか し。	【竿】 カン さを。	【秒】 ベウ のぎ、 時間のべう。	【砥】 テイ やくにつかみ、 やすし。	【眇】 ミョウ ほそし。	【相】 シャウ あい、にんそら をさむ、つかさ	【盃】 サイ 杯(八疊)と同	【界】 カイ さかひ、 かぎる。

【癸】 スイ はみづのと、 はかる。	【畏】 イ おそる、 したがよ。	【紅】 コウ べに、 くれなゐ。	【彙】 スイ 國字くめ。	【穿】 セン ひらがつ、 ひらく。	【科】 カ がしな、ほど、と が、おきて。	【砂】 サ すな、 いさご。	【省】 セイ かへりみる、 はぶく、やくし よ。	【益】 エキ はち國字茶器。	【皇】 クワウ きみ、みかど、 大いなり。
【耐】 タイ たふ、たへる、 しのぶ。	【約】 ヤク つかねる、くく ぼ、はぶく、ほく	【紉】 チウ しりがい。	【粃】 チ 國字もみ。	【突】 トツ つと、 しつ。	【秋】 シュウ あき、みのり、 とき。	【祈】 イ いのる、 つぐ。	【眉】 メイ まゆ、 ふち。	【看】 カン みる、のぞむ、 うかがふ。	【盈】 エイ みつ、あふる、 あまる。
【肘】 チウ ひぢ。	【耶】 ヤ 俗語、おやじ、 解、か、の疑問	【罕】 カン あま、まばら、 あみ。	【面】 メン かほ、おもて、 まのあたり。	【酋】 シュウ すげれる、 をさ、かしら。	【訂】 テイ はかる、くらぶ、 ただす。	【表】 ヘイ おきて、しるす、 のべしく、あら はす。	【芒】 マウ ほさき、 ひかり。	【致】 チ いたす、まかす、 むね、つくす、 (十益に非ず)	【肖】 セウ かたどる、 にる。
【肚】 ト はら。	【肝】 カン きも、 かなめ。	【美】 メイ うつくし、よし、 うまし。	【革】 カク つくりがは、き びし、せまる。	【重】 チュウ おもし、あつし、 おし、すなほ、 大いなり。	【込】 コウ 國字、こむ、 いりこむ。	【貞】 テイ ただし、さだ、 さだむ。	【要】 ユウ もとむ、まつ、 かなめ、もと。	【虹】 カウ にじ、 みだす。	【芋】 ユウ いも、 大いなり。
【飛】 ヒ とぶ、 こゆ。	【首】 シュ くび、かしら、 かみ。	【風】 フウ かぜ。	【音】 オン こゑ、おと、ね、 ふし、おとづれ。	【門】 モン くわんのき。	【辻】 ツジ 國字つじ。	【軍】 グン いくさ、たか ひ、つはもの。	【計】 ケイ かぞふ、かす、 はかる。	【衍】 エン あふる、みちる、 ひろし、おほし。	【芍】 シャク しやくやく。

〔葉〕 しをり、 しるべ、	〔案〕 つき、あ、ひちつ き、しらべ、	〔書〕 ふみ、しるす、 かみ、ほんす、	〔咬〕 あきらか、 月白し。	〔旅〕 おほし、ついで、 おほし。	〔料〕 はかる、しる、 かす、てあて、	〔桐〕 きり。	〔栓〕 木のくぎ。	〔桑〕 くは。	〔桂〕 かつら。
〔洌〕 すきよし、 すむ。	〔洋〕 おほし、ひろし、 大いなり。	〔洗〕 あらし、 きよし。	〔酒〕 あらし、 あらし。	〔氣〕 いきほ、がす、 いきほひ。	〔殊〕 こと、に。	〔栗〕 かたし、おそる、 くり。	〔桃〕 もも。	〔椴〕 あしかせ。	〔根〕 ね、もと、 はじめ。
〔鳥〕 からす。	〔洛〕 つづく、水の瀝 れる。	〔洞〕 ふかし。	〔洲〕 すい、しま、 く。	〔活〕 いく、 く。	〔殉〕 もとむ。	〔畔〕 あぜ、 ほとり。	〔珍〕 めづらし、 うまし。	〔狩〕 かり、 か。	〔烝〕 むす、 むす。
〔烘〕 たく、やく、 てらす。	〔流〕 ながる、うかぶ、 のぶ、くだる。	〔派〕 わかれる、 わかれまた。	〔津〕 つ、わたしば、 みなと。	〔洪〕 おほみづ、 大いなり。	〔殷〕 り、かん、大いな り、ただす。	〔畝〕 あぜ。	〔玲〕 金玉の鳴る聲。	〔珂〕 白珊瑚。	〔烈〕 さげし、 さかん。
〔祚〕 さきはひ、 くらゐ。	〔祝〕 いはふ、 かぬし。	〔祐〕 さいはひ、すけ、 たすく。	〔砧〕 きぬた。	〔矩〕 かねざし、 つねのり。	〔益〕 ます、くはへる、 すすむ、ゆたか。	〔畠〕 はたけ。	〔畜〕 たくはふ、 あつまる。	〔珊〕 よろめく聲。	〔特〕 ひとり、すく、 ことに。

〔秘〕 かそかに、 かくる。	〔崇〕 たたり。	〔祠〕 まつる、やしう、 ほこら。	〔破〕 やぶる、 ひらく。	〔砦〕 とりで。	〔眞〕 まこと、たゞし、 あつし。	〔竜〕 古龍(十六卷)の 古字。	〔秘〕 ひそか。	〔租〕 みつぎ、ねんぐ、 つむ。	〔秦〕 はた、 國の名。
〔祓〕 はらひ、 のぞく。	〔祖〕 せんだ。	〔神〕 かみ、 たましい。	〔砲〕 いしゆみ、 おほづつ。	〔砥〕 とし、といし、ひ とし。	〔眠〕 ねむる、 ねむ。	〔筭〕 かうがい、 かんざし。	〔竊〕 ふかし、 うるはし。	〔秩〕 ついで、つね、 ふち、さとし。	〔秤〕 はかり、 てんびん。
〔耕〕 すがやす、 すく。	〔紋〕 あや、 あや。	〔紐〕 ひも、むすぶ、 ゆふ。	〔純〕 まじりけなし、 よし、あつし。	〔紘〕 おほづな、つろ はて。	〔粉〕 こな、 かざる。	〔笏〕 しやく。	〔笈〕 おひ、 ほんばこ。	〔竝〕 なみ、ともに、 ならぶ。	〔秣〕 まがき、かひば、 わら。
〔毫〕 おゆ、 とぼける。	〔缺〕 かぐ、やぶる、 きす。	〔紡〕 つむぐ、 うむ。	〔素〕 しろし、きぢ、 むなし、まこと。	〔紗〕 しや。	〔紘〕 みだる、さかん なり。	〔筮〕 たけかて。	〔肩〕 かた。	〔耽〕 ふける、 たのしむ。	〔者〕 もの、は、この、 これ。
〔耘〕 くさざる、 のぞく。	〔翁〕 おきな、 ちち。	〔紛〕 みだる、 まざる。	〔納〕 いる、うける、 いたす、おさむ。	〔紙〕 かみ。	〔級〕 だん、しるし。	〔笑〕 わらふ、あむ、 あなどる。	〔育〕 やしなふ、 そだつ。	〔股〕 もも、 また。	〔耗〕 やしなふ、 そだつ。

〔袁〕 〔芙〕 〔芫〕 〔芥〕 〔舫〕 〔臬〕 〔肱〕 〔肯〕 〔肴〕 〔耿〕

衣のなかき服、人の名。
はちすの異名を芙蓉と云ふ。
さつまふじ。
からしな、あくた。
もやひふね、ふね。
ひかり、あてて、ひかげはしら。
たのみ。
あへて、うべなふ。
さかな。
あきらか、ひかり。

〔衿〕 〔虔〕 〔芝〕 〔芹〕 〔般〕 〔臭〕 〔肺〕 〔討〕 〔袂〕 〔衽〕

えり、むすぶ。
つかたしむ。
ひじりだけ、國言しばひ。
せり。
わぐる、わく。
にほひ、くさし。
はいのぞう。
たもと。
ちきり、しとね、ちきり。

〔衾〕 〔蚊〕 〔芳〕 〔花〕 〔芽〕 〔航〕 〔肥〕 〔託〕 〔記〕 〔衲〕

ふすま、しとね。
か。
よし、かざる、ほまれ。
あや。
めいむ。
わたる。
こゆる、こやす。
たのむ、まかす、よす、まかす。
のりす、かく、のりおぼゆ。
ころも、ぬふ。

〔財〕 〔鬼〕 〔馬〕 〔釜〕 〔配〕 〔軒〕 〔貢〕 〔豹〕 〔訓〕 〔衷〕

たから、かね、はたらき。
たましひ。
うま。
かま。
つれあい、すすむ。
たかしのあがる。
みつぐ、つぐ、すすむ。
へう、猛獣の名。
みちびく。
あたると、かなふ。

〔高〕 〔隼〕 〔釘〕 〔酌〕 〔起〕 〔骨〕 〔閃〕 〔針〕 〔酒〕

高(十一畫)は俗字たかし、おほし、まさる。
はやぶさ。
くぎ。
さかもり。
おこ、たつ、おこす、はじめ。
ほね。
ちらめく、ちらつく。
はり。
さけ。

十一畫之部

〔富〕 〔偵〕 〔僂〕 〔偕〕 〔停〕 〔偶〕 〔偉〕 〔側〕 〔健〕 〔乾〕

富の俗字(十一畫)を以て見よ。
さぐる、うかがう、まはしもの。
おかしし、おもふ。
ともに、かなふ。
とどまる、やむ。
ならぶ、そろふ、あはす、たまたま。
さいなり、さかななり。
かたはら、かたど、がは、ひた。
すこやか、つよし、たけ、はなはだ、ちます。
いぬ、そら、すこやか、つよし。

〔凰〕 〔婚〕 〔培〕 〔堀〕 〔國〕 〔唱〕 〔唯〕 〔區〕 〔勗〕 〔副〕

ほうわらの雌。
めとる、とつぐ。
つちかふ、やしなふ。
ほり、あな、ちがつ。
くに、ふるさと。
うたふ。
いらへ、はい、いた、うやうや。
まちまち、かくす、をさむ、こわけ。
開の偏字。
わかつ、そふ。

〔剩〕 〔婆〕 〔埜〕 〔執〕 〔基〕 〔啄〕 〔啓〕 〔卿〕 〔動〕 〔勸〕

あまつさへ。
ばば。
野の古字。
まると、たもつ、まると。
もとめ、もと、おこり、はじめ。
つつばむ、つつく。
ひらく、をしよ、まをす。
あきらか。
うご、はたらく、やもす、はらば。
かなが、きはむ。

〔寅〕 〔婦〕 〔壺〕 〔堂〕 〔堅〕 〔問〕 〔商〕 〔參〕 〔務〕 〔勸〕

とら(十二支の第三位)つつしむ。
よめ、をんな。
つぼ。
ただし、社寺、表座敷。
かたし、つよし。
つと、いひつけ、つと、いひつけ。
あきなひ、はかる。
みつましはる、あづかる、まいる。
まつりごと。
つとむ。

〔寄〕 〔御〕 〔彫〕 〔張〕 〔庶〕 〔帶〕 〔崇〕 〔崎〕 〔尋〕 〔寂〕

よす、よる、せまる。
すぶ、はべる、つかさ。
きざむ。
ひらく。
たみぐさ、おほし。
すぢ。
あかし、おこる。
さき(十二畫)崎と同じ、けはし。
尋(十二畫)の俗字。
さびし、しづか。
せまる、よる、つかさ。

宿	従	彪	彗	庸	庵	巢	岨	將	密
やどる、まどる。	したがふ、つきそひとも。	あだら、あや。	はく、はく。	いさほ、もちゆ。	くほり、らほ、くさや。	すくふ。	石の危き貌。	まさ、まさ、かつ、たすく。	ひそか、しづか。

徘徊	得	彬	彩	強	康	常	崔	專	尉
さまよふ。	う、よくする、まうけ。	あきかん、よし、あきらか。	あや、かざる、ひかり。	つよし、すこや、か、すがる。	やすし、大いな、り、たのし。	かつて、ひさし、かつて。	大いなり。	もつばら、まこと。	うかぶ、うかがふ。

徠	晤	既	旌	斌	敕	教	振	悉	悅
字。(八畫)の古	あきらか、あふ。	すでに、もはや、をばる、既は眼	あは、しるし、あらはす。	文と質とよく調、和すること、よ、(影に通ず)	いましむ、みこ、勅のり、熟語は	をしへ、いまし、め、さしづ、教、は非。	ふるふ、ちてく。	ことごとく、つよき。	よろこぶ、たのしむ。

悠	晨	皓	旋	斛	敗	救	挺	悌	悍
ひろし。	あした、よあけ、あき、あき。	あきらか。	かへる。	斗の十倍。	やぶる、まける、そこなふ。	すくふ、たすく、まもる。	ぬぐ、すぐる。	よろこぶ、なかよし。	つよし。

晩	晝	晦	族	斜	敏	敍	捕	戚	悟
ゆふべ、くれ、おくれる。	ひる。	つごもり、くらし。	やから、たぐ、あつまる。	ななめ、かたむく。	とし、はやし、し、おごそか、さと	ついで、つらぬ、はしがき。	とらふ。	みうち、したしむ。	さとりのり、さとる。

曹	浴	浮	浩	毫	歎	梶	梯	梧	朗
おほま、むれ、おほし。	ゆあみ、きよむ。	うき、うかぶ、さまよふ。	ひろし、ゆたか。	け、すこし。	歎(十二畫)の俗字。	かぢ、こすま。	はして。	あたまぎり。	ほがらか、を、あきらか。

望	浪	浦	浚	毬	欵	梨	條	梓	械
のぞむ、ねがふ、もち。	なみ、うごく。	うら。	さかし、さらふ。	まり、たま。	むせぶ、なげく。	なし。	えだ、すぢみち、なは。	あづき。	かせ、からくり。

爽	烽	涌	涉	海	欲	梁	梅	梢	梗
さわやが、ほが、らかあきらか。	のろし。	わく。	わたる、かかはる。	うみ、ひろし、大いなり。	ほつす、ねがふ、のぞむ。	うはし、つつみ、うつばり。	うめ。	こすま。	やまに、れ、ふき、し、とげ、たけ

犀	笙	窳	祥	眸	眼	略	瓶	率	狷
猛獣の一、どし、かたくするどし。	しやうのふえ。	かうくし、しづ、かふかし。	さいはひ、きざし、めでたし。	ひとみ。	まなこ、みる。	はぶく、みち、かすめとる。	かめ、つるべ、瓶(十三畫)の俗字。	したがふ、わり、あひ、ひきゆる。	かまし、かたし。

狹	筍	竟	移	研	眷	皎	産	珠	狼
せまし、せはまる。	はこ。	きはい、きはむ。	うつる、うごく、かはる。	とぐ、みがく、きはむ。	かへりみる、懸ふ、めぐみ。	しろし、きよし、ひかる。	うむ、くら、もとで。	たま。	おほかみ。

【第】 ^{ダイ} しなさい、いへ、 しなさいだめ。	【答】 ^{コタヘ} むちうつ。	【章】 ^{シヤウ} あや、いろどり、 あきら、ふみ。	【窓】 ^{マダ} 宿(十二畫)の 俗字。	【祭】 ^{サイ} まつり、 まつる。	【眺】 ^{テウ} ながむ、 のぞむ。	【畫】 ^エ 俗字(十四畫)の	【哇】 ^ワ うね、あぜ。	【班】 ^{ハン} なかつ、 ならぶ。	【狸】 ^リ たぬき。
【笹】 ^{ササ} 國字さき。	【笛】 ^{フエ} ふえ。	【胡】 ^コ くび、なんぞ、 大いなり、はる	【習】 ^{シユブ} かきぬ、 かきぬ。	【累】 ^{ライ} かきぬ、 しきりに。	【組】 ^{クミ} ひも、 ひも。	【紳】 ^{シン} 敬稱。おほおび、 敬稱。	【絃】 ^{ゲン} いと。	【粕】 ^{カク} かす。	【笠】 ^{カサ} かき。
【粗】 ^ソ あらまし、ぼぼ、 あらまし。	【符】 ^フ わりふ、 しるし。	【胎】 ^{ライ} はらごもる、 はじめ。	【聊】 ^{リウ} かりそめ、 かりそめ。	【翊】 ^{ユク} つつしむ、 たすく。	【良】 ^{レイ} つる、あみ、 國字わな。	【紬】 ^{チュウ} つむぎ。	【終】 ^{シュウ} をはる、きはま る、つくす、す	【細】 ^{サイ} ほろし、こまし、 かろし、せまし。	【粒】 ^{リツ} つぶ。
【舷】 ^{ゲン} ふなばた、 ふなべり。	【胚】 ^{ハイ} はらごもり。	【背】 ^{ハイ} せ、せなか、う しろ、そむく。	【胃】 ^イ みぶくろ。	【翌】 ^{ヨク} あくる日。	【羞】 ^{シウ} すすむ、まかな、 はぢ。	【絆】 ^{ハン} きづな、 つなぐ。	【紹】 ^{セウ} つぐ、とりもつ、 たすく。	【紫】 ^シ むらさき。	【紺】 ^{コン} こんいろ。
【船】 ^{セン} ふね。	【胞】 ^{ハウ} えな。	【設】 ^{セツ} まうく、おく、 おほいなり。	【袷】 ^{ソウ} 國字じゆばん。	【袈】 ^カ ころも。	【處】 ^{シヨ} をる、とどまる 處は俗字。	【萃】 ^{ヘイ} よるぎ。	【苧】 ^ソ からむし、 國字を。	【若】 ^{ニヤク} わかし、ごとし、 わかし。	【英】 ^{エイ} ひで、 はな。

【舶】 ^{ハク} おほふね。	【胖】 ^{パン} ゆたか、 大いなり。	【訪】 ^{ホウ} とふ、たづね、 まみゆ。	【規】 ^キ おきて、いまし む、のり、ただ し、かぎる。	【袖】 ^{シュウ} そで。	【蛉】 ^{レイ} 蜻蛉とんぼ。	【苗】 ^{メウ} なへ、 ちすじ。	【茅】 ^{マウ} ちがや、國字、 ちがや。	【苜】 ^{モウ} こも、 こも。	【苑】 ^{エン} その。	
【販】 ^{バン} あきなふ、 ひきぐ。	【貨】 ^カ たから。	【豚】 ^{トン} ぶた。	【許】 ^コ ゆるす、きく、 ところ。	【袋】 ^{タイ} ふくろ。	【術】 ^{ジュツ} わざ、みち、 はかりこと。	【茂】 ^{モウ} ゆたか、しげし、 ゆたか、つとむ。	【范】 ^{ハン} いはち、 いがた。	【苜】 ^{モウ} こけ。	【苜】 ^{モウ} まこも。	
【頃】 ^{ケイ} しばらく、 このごろ。	【閉】 ^{ヘイ} とぎ、 ふさぐ。	【醉】 ^{スイ} 俗字(十五畫)の	【赦】 ^{シャ} ゆるす、 なだむ。	【貫】 ^{クワン} ぬく、つらぬく、 うがつ、あたる。	【麥】 ^{マク} むぎ。	【魚】 ^{イサ} うを。	【雪】 ^{セツ} ゆき、あらふ、 そそぐ。	【釣】 ^{テウ} つる、 もとむ。	【那】 ^ナ なんぞ、いづれ、 かの。	
【傑】 ^{ケツ} まさる、すぐる、 ぬきんでる。	十二畫之部		【鹿】 ^{ロク} しか。	【頂】 ^{テイ} いただき。	【雀】 ^{ソク} すすめ。	【野】 ^ノ の、のはら、か なか、いやし。	【近】 ^{キン} ちかし、 てぢか。	【責】 ^{セキ} せむ、とがむ、 そしる。	【麻】 ^マ あき。	【鳥】 ^{トウ} とり。
【堯】 ^{ヤウ} たかし、 とほし。	【唳】 ^{レイ} ほがらか なる聲。	【善】 ^{ゼン} よし、まさる、 大いなり。	【博】 ^{ハク} ひろし、 大いなり。	【創】 ^{ソウ} きず、はじめ、 きずつく。	【割】 ^{カク} きく、わる、た つ、きる。	【傳】 ^{デン} つぎそひ、もり、 たすけ、いたる。	【剋】 ^{コク} する、きる、 うごく。	【備】 ^ビ そなふ、みな、 そなはる、たる。	【凱】 ^{ガイ} やわらぐ、よし、 かち、たのしむ。	

【場】 には。	【圍】 めぐむ。	【單】 ひとへ、ひとり、 大いなり。	【喜】 よろこぶ、うれ よみす。	【勝】 かつ、たふ、す ぐる、かなよ。	【嵐】 あらし。	【尊】 たか、たる、 たふとし。	【寓】 やす。	【媒】 なかだち、 もと。	【報】 むくい、つぐ、 こたふ。
【堤】 つづみ、 どて。	【堪】 たへ、 しのぶ。	【喩】 たとへ、 をしふ。	【喬】 たかし、 おごる。	【勞】 いたはる、 つかる。	【崎】 十一畫崎と同	【岳】 いはほ、 けはし。	【富】 ゆたか。	【媚】 うつくし。	【堡】 とりで、 つづみ。
【掬】 すくふ、 むすぶ。	【惣】 すべて、 じく用ふ。	【惟】 これ、ただ、 おもんみる。	【強】 強(十一畫)に 同じ。	【幄】 とばり。	【巽】 たつみ、 はやらぐ、 巽の「風」	【嶮】 山のくま。	【尋】 たづぬ、 ひろ。	【寒】 さむし、 おそる。	【奠】 さだむ、 そなへる。
【掘】 ほる、 うがふ。	【厚】 あつし、 まこと。	【惠】 めぐむ、 さとし。	【弼】 たすく、 すけ、 ただす。	【帽】 かぶるもの、 帽は俗字。	【斑】 まだら、 ぶち。	【散】 ちる、はなつ、 ひま。	【探】 さがす、 もとめる。	【掌】 てのひら、 つとめ。	【捲】 まく、いさむ、 をさむ。
【掛】 かけ、 わかけ。	【扉】 とばら。	【情】 まこと、 なまけ。	【復】 かへる、もどす また、ふたたび。	【幾】 いく、ほとんど こひわがふ。	【斐】 あや、 うるはし。	【敝】 たかし、ひろし ひらく。	【捧】 さぐ。	【授】 あたへる。	【掃】 はく、 はらふ。

【棍】 ぼう。	【期】 あふ、かざる、 ひとまはり。	【最】 もつとも、 すつとも。	【晰】 あきらか。	【景】 ひかり、さかひ 大いなり、あふ	【斯】 この、 ここ。	【敦】 あつし、さかん なり、つとむ。	【敢】 あへて、おかし いさむ。	【捷】 かち、 はやし。	【捨】 すつ、 すてる。
【棧】 たな、かけはし くるま。	【朝】 あさ、あす、と も、つと。	【曾】 ちつて、すなは ち、かさね。	【智】 ちえ、さとる、 とも、かしこき 人。	【晶】 あきらか。	【款】 まこと、よろこ ぶ。	【椀】 わん、 こぼち。	【棚】 たな、 かけはし。	【棹】 をさ、かい。	【植】 うゑ、たつ、 おく。
【森】 もり、しげる、 盛んなる形。	【碁】 ごいし。	【替】 かはる、 はろぶ。	【普】 あまねし、ひろ し、大いなり。	【晴】 はる、はれ、 うららか。	【殘】 そこなふ、のこ る、やぶる。	【欺】 あざむく、うそ いづはり。	【棒】 ぼう、 つゑ。	【椎】 つち、うつ、 しひ。	【接】 つぐ、くまび。
【淘】 たがす。	【清】 きよし、 すむ。	【深】 ふかし、 ふかさ。	【涯】 みぎは、きし、 ほとり。	【殼】 から。	【殖】 うゑ、しげる、 ふやす。	【欽】 つつしむ、 うやまふ。	【棉】 わた。	【棟】 むね、 むなぎ。	【棠】 やまなし。
【淡】 あはし、 うすし。	【淨】 きよし、 いさぎよし。	【淑】 よし、 きよし。	【涵】 ひたす、ひたる、 ひろ。	【游】 俗字(十三畫)の 遊。	【琉】 寶玉。	【現】 あらはす、いま、 うつ。	【犁】 たがやす。	【然】 もゆ、しかり、 ゆする。	【淀】 よど、 くちごもる。

添 <small>ソフ</small>	浅 <small>アサシ</small>	淳 <small>アツシ</small>	混 <small>マじる</small>	淵 <small>フチ</small>	甥 <small>ウチ</small>	瑠 <small>カガク</small>	猛 <small>タケ</small>	無 <small>ナシ</small>	涼 <small>スズシ</small>
そふ、ます。	あさし、うすし。	あつし、まこと。	あはす、あはす。	ぶち、いけ、し。	むひ、むこ。	かがやく、球に似たる美石。	たけし、つよし、さびし。	むなし。	うすし、すずし、まこと。
稀 <small>カ</small>	短 <small>ミ</small>	盛 <small>モ</small>	登 <small>ノ</small>	番 <small>ハ</small>	畫 <small>カ</small>	理 <small>リ</small>	球 <small>ク</small>	爲 <small>ナ</small>	焔 <small>ヒ</small>
まれ、たまふ、か、うすし。	みじかし、すくなし。	もり、もる、みつ、しげる。	のぼる、たかし。	かす、ばんにん、つるむ。	くぎり、わかづ、え、えがく。	をさむ、ただす、とうる、わかる。	美玉、まる。	なす、ため。	ほのほ、ほのほ。
稍 <small>サウ</small>	硬 <small>カウ</small>	盜 <small>ヌ</small>	發 <small>ハツ</small>	雷 <small>ライ</small>	筒 <small>ツツ</small>	筍 <small>タケ</small>	筐 <small>カウ</small>	竣 <small>ジュン</small>	程 <small>テイ</small>
ひや、ひと。	かたし、こはし、つよし。	ぬすむ、ひそかに。	はなつ、おこる、ひらく、あばく。	雷は俗字、とめとどまる。	つづ、つばら、筒書つづら。	たけのこ。	はこ。	をばる、とどむ。	のり、ほど、はかる、かす。
税 <small>ゼ</small>	硯 <small>ケン</small>	晞 <small>キ</small>	皓 <small>カウ</small>	疎 <small>ソ</small>	等 <small>トウ</small>	答 <small>タウ</small>	筭 <small>サン</small>	童 <small>ドウ</small>	窳 <small>ク</small>
みつぎ、ねんぐ、おくる。	すすり。	のぞむ、みる、したふ。	しろし、ひかる、あきらか。	疎に同じ、うとばら。	しな、たぐひ、ともがら、ひと。	こたふ、むくゆ。	はやす、はす。	わらべ、こども。	きはまる、つまる。
統 <small>トウ</small>	絲 <small>シ</small>	潔 <small>ケツ</small>	絞 <small>カウ</small>	筏 <small>ヘツ</small>	筆 <small>ヒツ</small>	筑 <small>チク</small>	策 <small>サク</small>	筋 <small>シン</small>	窳 <small>ク</small>
すぶ、はじめ、もと、のり。	いと。	きよし、はかる。	くびる、しめる。	いかだ。	ふで。	築。	かきつけ、はかりこと。	すぢ、ちから。	まじ、あきらか。

翁 <small>オウ</small>	脇 <small>ワキ</small>	胴 <small>ドウ</small>	舒 <small>シュ</small>	草 <small>クサ</small>	粧 <small>シヤウ</small>	給 <small>キツ</small>	絢 <small>ケン</small>	絮 <small>キョ</small>	絡 <small>ラク</small>
あはす、さかんなり、あつむ。	脊に同じ。	だいぢやう。	のぶ、ゆるやか、おもむろ、ついで。	あらし。	よそほひ、けしやう。	そなへる、たす、たまもの。	あや、いろ。	わた。	まとふ、めぐる、からむ。
胸 <small>キョウ</small>	脂 <small>シ</small>	能 <small>ノウ</small>	舜 <small>シュン</small>	荏 <small>ジン</small>	粟 <small>リョク</small>	絳 <small>クワイ</small>	絳 <small>コ</small>	絶 <small>ゼツ</small>	翔 <small>シヤウ</small>
むね、こころ。	あぶら、こえる。	たむ。	むくげ、はちす。	そらまめ。	あは、もみ。	しつけいと、しげいと。	はかま。	たつ、ほろぶ、やむ、つくす。	かける、やすらか。
脅 <small>ケツ</small>	脊 <small>セキ</small>	脈 <small>マク</small>	荒 <small>クワウ</small>	荀 <small>ジュン</small>	茸 <small>ジョウ</small>	茶 <small>チャ</small>	蛤 <small>カク</small>	街 <small>ガイ</small>	裁 <small>サイ</small>
おびやかす。	せ、せなか、すべ。	ちやく、ちのすぢ。	あれる、みだる、大いなり。	人の姓。	しげる、あつま、きのこ、園管、たけ。	ちや。	はまぐり。	ちまた、おほとほり。	たつ、さく、ただす。
詞 <small>シ</small>	註 <small>チュウ</small>	賀 <small>カ</small>	貼 <small>テ</small>	買 <small>バイ</small>	茜 <small>セン</small>	菴 <small>アン</small>	桂 <small>ケイ</small>	視 <small>シ</small>	
いふ、ことば。	ときあかす、かきしらす。	よろこぶ、よし、いはふ。	つく、はりつく。	かふ、かへる、うる。	あかね。	とほし、はるか、ひろし、大いなる。	こほろぎ。	うかがふ、みる、のぞむ、うかがふ。	
証 <small>セイ</small>	評 <small>ヘイ</small>	貴 <small>キ</small>	買 <small>バイ</small>	越 <small>エツ</small>	荐 <small>セン</small>	蛙 <small>ワ</small>	衆 <small>シュウ</small>	袴 <small>ハクマ</small>	觚 <small>コ</small>
いさむ、體に代用す。	しなだめ。	たふとし、たかし。	かふ、もとむ。	こゆ、わたる。	かさねて。	かへる。	おほし、もろも、ち、多くの人。	ももひき、園管はかま。	さかづき、ただし。

詔 みことのり、つ
ぐをしよ。
 象 ざう、きざし、
あや。かたち。
 貯 たくはふ。
 賁 かざる、あや。
大いなり。
 超 こす、すげれる、
すぎる。
 躰 體(二十三畫)
の俗字。
 迪 みち、すすむ、
いたる。
 邸 やしき、
いたる。
 鈔 うとる、
うつす。
 間 間の俗字。

閔 あはれむ、いた
む。つとむ。
 雅 ただし、つね、
まさ。みやびや
か。
 雲 くも。
 順 やしたがふ、のぶ、
やわらぐ。
 黍 きび。
 軫 うごく、
もとる。
 迫 せまる、きびし、
ひそぐ。
 量 ます、はかる、
かす。ほど。
 開 ひらく、花さく、
はじむ、おこる。
 閑 ひとづ、ふせぐ、
ひま、しづか。

阪 さか、つつみ、
けはし。
 雁 かり。
 項 うなじ、
大いなり。
 風 同字おろし。
 黒 くろ。
 軸 しんぎ、
しんぼろ。
 貳 ふたつ、そふ、
かさね、ふただ
び。
 鈞 めかた、
ひとし。
 閒 あひだ、すさま、
しづか、しぼら
く。
 閏 うるふ。

雄 をす、たけし、
な。つよし。
 集 あつまる、なる、
やはらぐ。
 須 すべからく、
すま。
 黃 こがね。
 僅 すこし、わづか、
ほとんど。
 催 うながす、まさ
す、もよほす。
 傳 つたふ、さづく、
ゆづる、つぐ。
 勤 つとむ、はたら
く、ねんごる。
 募 まねく、
まねく。

十三畫之部

圓 まる、まどか、
まつたく。
 塘 つつみ。
 媪 おうな、
ばば。
 幹 みき、もと、
つよし。
 傾 かたぶく、
よこしま。
 傷 いたむ、そこな
ふ、さす、うれ
ふ。
 備 やとふ、
やといにん。
 勸 とる、つかる、
ほろぼす。
 勦 あはす。
 園 はたけ、その、

塚 塚の俗字、
つか、い。ただ
大いなり。
 嫁 とつぐ、
よめいり。
 廊 ひさし、
わたどの。
 債 かり、
おひめ。
 僊 やまびと。
 働 はたらく、同字。
 勢 いきほひ、
ちから。
 嗣 つぐ、うぐ、
よつぎ。
 塊 つちくれ、かた
まり、ひとり。
 奥 おく、
すみ。

嗟 けはし。
 廉 かど、をさむ、
いさぎよし。
 彙 たぐひ、
あつめる。
 意 こころ、
おもふ。
 感 うごく、
いたる。
 想 おもふ、
おしはかる。
 揖 あしやく、
すすむ。
 掬 きる、たつ、
そろふ。
 斟 はかむ、
はかる。
 暈 かさ、めまい、
くらむ。

暄 あたたか。
 會 あふ、あつまる、
たま。
 微 かすむ、かくす、
こまか、なし。
 憚 あつし、
はかる。
 愚 おろか。
 愉 よろこぶ、
たのしむ。
 援 たすく、
たすく。
 揚 あがる、
ひらく。
 新 あらた、
はじめ。
 暇 やすみ、
やすみ。

暑 あつし、
あつさ。
 極 むね、きはむ、
はて、いたる。
 愛 ここのむ、
おどろく。
 愕 あはてる、
おどろく。
 惶 おそる、
おはてる。
 愈 まさる、まさ
す、いよい
よ。
 揮 ふる、
うごかす。
 敬 うやまふ、ゆき、
ひろのり、つ
つむ。
 暗 くらし、
おろか。
 暉 ひかる、あき、
てる、かがやく。

暖 あたたか、
やはらか。
 業 わざ、なりはひ、
つとむ、すでに。
 檜 なら。
 椿 同音、
つばき。
 椰 やし。
 歲 とし、
よはひ。
 游 あそぶ、
あそぶ。
 渠 みぞ、
かしろ。
 湘 地名に用ふ。
 湊 みなと。

【湯】 ゆ、みそ、 シヤウ	【渚】 なぎさ、 こじま、	【湖】 みづらみ、	【温】 温(十四畫)の 俗字、	【殿】 との、ごてん、 しごむ、しんが	【楊】 やなぎ、	【楠】 楠音、 くすの木、	【楫】 かい、 かぢ、	【煙】 かき、 かすみ、	【渡】 わたす、 わたさ、
【澁】 あたふ、 あつし、	【測】 はかる、	【渾】 大いなり、すべ て、にござる、	【港】 みなと、	【渥】 あつし、 うるほふ、	【榆】 にれ、	【楓】 かへで、	【楚】 うばら、 うつら、	【輝】 かがり、 かがやく、	【湃】 なみうつ、
【暗】 めくらし、	【盟】 ちかふ、あきら かまこと、	【琵琶】 樂器、	【琥】 寶石、	【猪】 俗(十六畫)の 俗字、	【爺】 ちち、	【煎】 つくる、せんず、	【煌】 かがやく、	【熙】 ひかる、ひろむ、 てる、かがやく、	【渺】 ひろし、 はるか、
【睡】 みねわり、	【睚】 まぶち、 にらむ、	【琳】 美玉、	【琢】 みがく、	【猫】 ねこ、	【猷】 ごとし、	【煤】 すす、	【煥】 ひかり、あや、 あきらか、	【碑】 たていし、 いしぶみ、	【睦】 むつまじ、 やはらぐ、
【督】 みはり、ひきぬ る、すけ、ただ す、あつし、	【睨】 にらむ、 うかがう、	【當】 あたる、かなふ、 まさに、	【琶】 樂器、	【琴】 こと、	【猶】 はかる、なほ、 より、	【煉】 ねる、	【照】 てらす、ひかる、 てる、あきらか、	【碗】 盥(十畫)の俗 字、ちやわん、	【矮】 ひくし、 ちぢまる、

【肆】 つらぬ、みせ、 つとむ、	【羨】 うらやむ、した ふ、あふれる、	【義】 よし、むね、の り、ただし、	【糧】 かて、	【筧】 かけひ、 とひ、	【窟】 いはや、 はな、	【稚】 おさなし、わか、 いとけなし、	【祿】 扶持、 さいは、よし、	【禁】 つとむ、 つとしむ、	【礎】 いかり、
【肅】 おごそか、	【聖】 ひじり、	【羣】 おほし、 おほれ、くみ、	【經】 つたて、すぢ、ふ、 つね、のり、	【筮】 うらなふ、	【竪】 俗(十六畫)の 俗字、	【稗】 こまか、	【禽】 とり、 とりこ、	【脱】 ぬぐ、はづす、 はぶく、ぬける、	【脛】 すね、
【脚】 すね、あし、 たちば、	【聘】 まねく、めす、 めとる、	【群】 羣の俗字、	【絹】 きぬ、	【粳】 うるし、	【筵】 たかむしろ、	【稜】 かど、みいづ、 いきほひ、	【稔】 みとる、 とし、	【臺】 俗(十四畫)の 俗字、	【脩】 おさむ、ひさし、 つとしむ、
【試】 ためし、 たころみ、	【解】 とく、とほる、 さとる、	【補】 おぎなふ、 たすく、ます、	【蜀】 いもむし、 國名、	【蛾】 かいこのてふ、	【莫】 くらし、やむ、	【莊】 おごそか、 田舎の家、	【荷】 になふ、	【鼻】 しうと、	【唇】 唇は俗字、 くちびる、
【莞】 ほほむ、	【詢】 とふ、はかる、 まこと、	【詣】 いたる、 ゆく、	【詠】 うたふ、よむ、 ながむ、	【裕】 ゆたか、 のびやか、	【裳】 ころも、	【蜂】 ほち、 ほこさき、	【號】 さけぶ、となへ、 さしづ、	【荻】 をぎ、	【莖】 つか、

【薑】 ミタル、 みる。	【詮】 つぶさに。	【詩】 ほころ。	【誇】 からうた。	【裏】 うち。	【装】 むをよむ、 つ	【衙】 あつまる。	【蛸】 くも、 國書たこ。	【虞】 はかる、 やすんず。	【莓】 きいち。
【豐】 體の古字、豐の略字として用ふるは非。	【雷】 かみなり、いかづち、うづ。	【雌】 めす、 にぶし。	【鈴】 すず。	【鉄】 鉄の古字、鐵の略字とするは非。	【鉅】 つりばり、かたし、こはし、大いなり。	【酪】 あまぎけ。	【迺】 乃(二畫)に同。	【載】 のせる、いただはじむ。	【跡】 あと、 あしあと。
【資】 たすく、あたふ、はかる、たから。	【靖】 やすし、きよし、はかる、おもふ。	【雉】 きじ。	【阿】 おほねる。	【鈿】 かんざし、あをがひ。	【鉉】 つる。	【鉛】 なまり、おしろい、したかよ。	【郁】 あたらか、さかんな貌。	【農】 たつくる。	【跳】 をどる、とびあがる。
【頌】 ほめる、たたへる。	【韭】 にら。	【電】 らなづま。	【附】 つく、よる、ます、ほどこす。	【鉢】 はち。	【鉦】 かね、 どらね。	【鉞】 おの。	【郊】 まちはづれ。	【退】 しりぞく、 さる、ゆづる。	【路】 みち、 くらゐ。
【鼎】 かなへ。	【馴】 なる、 すなは。	【飲】 のみ。	【頓】 ぬかす、 とどむ。	【鼠】 ねずみ。	【裙】 もすそ。	【話】 はなし、 かたる。	【鳩】 はと。	【飯】 いひ。	【預】 かねて、 あらかじめ、 あづける。

十四畫之部

【雍】 やはらぐ、 むつまじ、やす。	【頤】 わかつ、 しく。	【飭】 ととのふ、 おさむ、 ただす。	【馳】 およ。	【鼓】 つづみ。	十四畫之部				
【嘉】 よし、よみす、 む。よろこぶ、このはかる、 あ。	【圖】 はかりごと。	【壽】 とし、よはひ、 ことぶく。	【嫗】 はば、 なうな。	【賞】 なむ、 かつて、 ころむ。	【境】 さかひ、 かぎり。	【嫡】 ほんさへ、 よつぎ。	【察】 みる、 しる、 あきら。	【僖】 よろこぶ、 たのしむ。	【僥】 さいはひ、 もとむ。
【僧】 佛門に入りたる人。	【僚】 とも、 ともがら、 よし。	【彰】 あきら、 あらはす。	【慎】 つつしむ、 しづか、 古字。	【搖】 ゆる、 がす。	【夢】 ゆめ。	【搏】 うつ、 いたる。	【暢】 のび、 のどか、 とほる、 みつる。	【實】 みつる、 まこと。	【僞】 いつはり、 うそ、 にせ、 あやまり。
【像】 かたち、 ならふ、 かたどる。	【童】 わらわ、 しもべ、 おろか、 おきな。	【嶺】 高くけはし、 けも同じ。	【愿】 よし、 すなは、 つつしむ。	【愬】 うつたへ、 おそる。	【損】 へる、 へらす、 おとす。	【搬】 はらふ、 うつす。	【嗅】 かすか、 くらし。	【對】 こたへ、 あたる、 こたふ。	【僑】 たかし、 かりすま。
【僭】 かると、 なぞらふ、 分を越ゆるの意。	【僕】 しもべ、 したがふ。	【廓】 ひらく、 大いなり。	【慈】 いつくしむ、 よし。	【態】 さま、 わざと。	【擲】 おさへる、 なせる。	【旗】 はた、 しるし。	【榮】 あをきり、 さかゆ、 ほまれ。	【榎】 えのき。	【槍】 やり。

【楨】 マシ まさま、まさ。	【槐】 カイ えんじゆ。	【鼓】 コ 俗字(十三畫)の	【瑚】 コ さんご。	【猿】 エン まさら。	【癸】 ケイ ひともしび、ひかる。	【準】 ジュン めあて。	【源】 ゲン みなもと。	【溢】 イツ あふる、みつ。	【柳】 リウ 同字さかき。
【榧】 ヒ かや。	【構】 コウ つかまふ、つくる。	【監】 カン かいらべる、かがみ。	【瑟】 セツ おほし、こまや、つみ。	【獄】 ゴク おほし、のみ、おほし。	【爾】 ニ おほし、のみ、おほし。	【溶】 ヨウ とける、とかす。	【溝】 コウ ほり。	【温】 オン あたたか、いでゆ。	【榔】 ラウ びんろろの木。
【禎】 テイ さいはひ、ただし。	【碩】 セキ 大いなり、ひろし、みつ。	【盡】 ジン つく、つくす、みな、を、はる、尽は略字。	【瑞】 ズイ よろこび、めでたし、しるし、玉。	【獅】 シ しし。	【犒】 カウ ねぎらふ。	【熊】 ク くま。	【滋】 シ おほし、おほし。	【溪】 ケイ たに。	【歌】 カ うた、うたふ。
【福】 フク さいはひ、しあはせ。	【碧】 ヘキ あをく美しき石あをみどり。	【綬】 ジュ くみも、しるし。	【端】 タン ただし、なほし、ただし、はし。	【稱】 ショウ はかる、となふ、かなふ。	【綺】 キ うつくし、やう、あや、もやう。	【精】 セイ もつばら。	【箔】 ハク すだれ。	【算】 サン はかりこと、はかり。	【管】 クワン ふえ。
【種】 シュウ たね、もと、たね、やから。	【襖】 クイ はらふ、ひそい。	【綜】 ソウ すが、おさむ。	【緊】 キン かたし、きびし、せまる。	【粽】 ソウ ちまき。	【簾】 レン えびら。	【箒】 シュウ はき。	【箝】 ケン くびかせ、とざす。	【箇】 カ 個は俗字、かず。	【窪】 クワ ふかし。

【綸】 リン つりいと、つかさ、おさむ。	【緋】 ヒ あか、ひ。	【網】 バウ あみ、おきて。	【綽】 シヤク ゆるやか、しとやか。	【綱】 カウ つな、すべ治む。	【粹】 スイ まよし、まつたし。	【箋】 セン かきもの、ふみ。	【箏】 ソウ こと。	【箕】 キ み。	【竭】 ケツ やぶる、やぶる。
【綿】 ベン わた、まとふ、やはらか。	【腎】 ジン じんぞう、かなめ。	【苜】 シヤウ しやうぶ。	【菓】 カ くだもの、このみ。	【菊】 キク 花の一種。	【與】 ユ なま、くみ、かるともに、あづかる。	【腑】 フ はらわた。	【肇】 ショウ はじむ、ただす、はかる。	【翠】 スイ みどり。	【罨】 イン ぬ、わく、ぬき。
【綠】 リョク みどり。	【維】 ユイ つな、ただ、これ。	【菁】 セイ かぶ、うるはし。	【菰】 コ まこも。	【董】 チュウ すみれ。	【舞】 ブ まひ、あぐる、まひ、あぐる。	【腕】 ワン てくび。	【翡】 ヘイ かはせみ。	【罪】 サイ つみ、とが。	【綾】 リョウ あや、あやぎぬ。
【蜻】 セイ とんぼ。	【菩】 ボ ほろひ草、ほろひ。	【莽】 マウ 大いなり。	【菜】 サイ な、さい。	【華】 カ かざり。	【艇】 テイ こぶね。	【臺】 タイ うてな。	【脾】 ヒ ひざう。	【聚】 シュ あつめる、つどふ。	【置】 チ おく、たてる。
【蜜】 ミツ みつ。	【萊】 ライ あかざ。	【道】 ドウ さまよひ、あそぶ。	【輕】 ケイ かろし、うすし、あなどる。	【賑】 シン にぎはふ、めいむ。	【認】 ニン みとむ、ゆるす。	【誓】 セイ ちかふ、ちぎる、いましめ。	【誌】 シ しるす、かきつ、ける、おぼゆる。	【誠】 カイ つた、いましむ。	【裳】 ショウ もすそ。

〔裾〕 すそ。	〔菱〕 ひし。	〔速〕 すみやか。	〔輔〕 たすく、すけ、 そへ。	〔賓〕 まらうど、 したがふ。	〔豪〕 すぐる、ひいで ける、つよし、た ける。	〔説〕 いのる、のぶ、 とる。	〔誦〕 となふ、 うたふ。	〔誥〕 ちかひ、さとす、 ちかひをしへ。	〔裸〕 はだか。
〔逦〕 俗字(十七畫)の 通。	〔途〕 みち。	〔逞〕 たくまし、 さかんなり。	〔造〕 つくる、いたる、 はじむ。	〔赫〕 あかし、かがや く、ひかる。	〔貌〕 かほ。	〔誕〕 ひろし、大いな り、うまる、あ ざむく。	〔誠〕 まこと、 實に。	〔誨〕 をしへ、 さとす。	〔褻〕 國字つま。
〔逢〕 あふ、 大いなり。	〔透〕 すとおる、 すかす。	〔髣〕 さきにたり。	〔飼〕 やしなふ。	〔領〕 くび、をさむ、 さとる。	〔限〕 かぎり、さかひ、 はかる。	〔閤〕 へや、 ねま。	〔銚〕 かま、 かま。	〔銚〕 かま、 かま。	〔郡〕 こほり。
〔連〕 ひらぬ、およぶ、 ひらぬ。	〔通〕 とほる、いたる、 ひらぬ。	〔魁〕 さきがけ。	〔飾〕 かざる、 ととのふ。	〔颯〕 風の聲。	〔鞞〕 きづな、 ほだし。	〔閤〕 いさた、いへが ら、くらみ。	〔銘〕 しるす。	〔銀〕 せろかね、 せろかね。	〔郎〕 をつと、つま、だ んな、をのこ。
〔齊〕 ひとし、ととの ふ、ただし。	〔鳳〕 おほとり。	〔魂〕 たましひ、 こころ。	〔飽〕 あつく、 みつ。	〔飴〕 あめ。	〔韶〕 つぐ、うつくし、 うららかに。	〔降〕 くだる、したが ふ、ふる。	〔閣〕 たかどの、もの とどむ、くしよ、 とどむ。	〔銅〕 あかがね。	〔酸〕 いたむ。

十五畫之部

〔層〕 かさね、 たかどの。	〔寬〕 ひろし、 ゆるす。	〔墨〕 すみ、 くろし。	〔嘻〕 たのしむ、やば いたむ、なげく、 いたむ。	〔劍〕 つるぎ、 たち。	〔儉〕 へりくだる、 へりくだる。	〔億〕 おもんばかる、 やすんず、はか る。	〔鼻〕 はな。	〔鳴〕 なく。	
〔劉〕 まさかり、 漢の姓。	〔劇〕 しげし、 しげし。	〔儀〕 のり、よし、の つとる、かたど る。	〔履〕 ふつ、 ふむ。	〔審〕 つくはし、 つくはし。	〔嬉〕 たのしむ、 うつくし。	〔嘯〕 うそぶく、 うそぶく。	〔劈〕 やぶる、 やぶる。	〔僻〕 かたよる、くせ、 ひがむ、ひなな。	〔價〕 あたひ、 ねうち。
〔慕〕 おもふ、 おもふ。	〔慣〕 なれる、 なれる。	〔德〕 めぐむ、のり、 さいはひ。	〔影〕 すがた、 すがた。	〔廟〕 おたまや、 おたまや。	〔幣〕 ぬき、しで、 たから。	〔幟〕 はた、 はた。	〔寮〕 つかさ、 こまど。	〔嬌〕 うつくし、 むすめ。	〔增〕 かす、 かさね。
〔慮〕 おもんばかる、 おもふ。	〔慧〕 さとし、 かしこし。	〔慰〕 なぐさむ、 たのしむ。	〔徵〕 めす、あきらか、 しるし、こらす。	〔弊〕 やぶる、 つかさ。	〔廣〕 ひろし、ゆたか、 大いなり、むか し。	〔暴〕 あらず、 そこなふ。	〔敵〕 あひて、あたる、 あだ、かたき。	〔摘〕 あはく、つむ、 さししめす。	〔摧〕 くだく、 くだく。
〔摑〕 うつつ、 國字つかむ。	〔慶〕 よろこぶ、よ し、さいはひ。	〔懷〕 なげく、 なげく。	〔徹〕 とほる、とほす、 あきらか。	〔彈〕 ひじく、 ひじく。	〔塵〕 あせ、 あせ。	〔暮〕 くる、ゆよ、 おもしろ。	〔敷〕 ひろし、 ひろし。	〔摩〕 する、みがく、 とぐ、せまる。	〔摺〕 たたく、 ひたす。

【漢】 あまのこ、あまのがは。	【歎】 いなげく、いたむ。	【様】 ありさま。	【樋】 かひ、とひ、かけひ。	【槽】 かひをけ、とひ。	【樂】 たのしがく、たのしむ。	【概】 おほむね、おほむね。	【暫】 わづか。	【數】 かそえ、はかる、おぼし、はら。	【樗】 のぶ。
【漁】 いさり、れふし。	【毅】 こはし。	【樓】 たかとの、やぐら。	【標】 ま、と、てほん、位置。	【樟】 くす。	【槻】 つき、つきやき。	【犢】 こうし。	【漾】 ただよふ、ながし。	【滴】 したたり、しづく。	【漸】 やうやく、やき、すすむ、きざし。
【漆】 うるし、ぬるし。	【演】 ひく、のぶ、かよふ。	【毆】 うづ。	【模】 のり、てほん、もやち。	【樞】 とぼそ、まなか、はじめ、かなめ。	【槿】 むくげ、きはす。	【瑩】 美石、あきら、つや、てる。	【熟】 にる、つらつら、あきら、なら。	【漫】 ひろし、はびこ、る、みつ。	【漲】 あなる、あふる。
【稽】 はかぶ、はかる。	【磊】 おほくの石、大きな石。	【確】 つかし。	【皴】 ひだ。	【瑠】 俗字、寶玉、の	【瑳】 みがく、玉。	【瑤】 美玉。	【熱】 あつき、やく。	【滿】 みつ、みつる、たる。	【滯】 とどこほる、とどまる。
【穀】 たなつもの、やしたふ。	【稼】 うらう、はたらく。	【磁】 じせき。	【盤】 さら、はき。	【畿】 かぎり、さかひ、みやこ。	【瑪】 寶石。	【篇】 かきもの、しよもの。	【節】 ふし、みまを、はぶく、いはひ	【篋】 たかむら、やぶ。	【稻】 いね。

【稷】 きび、くに。	【稟】 稿も同じ、わら、したたがき。	【磬】 おほいし。	【瞑】 めくら、めをあはす。	【皚】 けつぱく。	【瑯】 琅字、玉の聲、の	【落】 まがき。	【箭】 し、の、だけ。	【箴】 いはり、いしぱり。	【窳】 かま。
【舖】 略字、(十五畫)の	【腸】 はらはた。	【義】 人の姓。	【練】 ねる、えらぶ、けみす。	【緞】 こまかし、くはし。	【緩】 ゆるし、おそし。	【緯】 よこいと、よこすぢ。	【糊】 ねばる、ねばる。	【箱】 かたみ。	【窮】 きはむ、つく、ふさぐ。
【腹】 はら、こころ、いだく、こころ。	【腰】 こし。	【署】 やくしよ、やくわり、しるし。	【締】 むすぶ、とりしまる。	【緒】 いとぐち、はじめ。	【縁】 へり、ふち、ちなむ、たより。	【著】 あらはる、しるす、あきら、か。	【範】 てほん、のり、いかた。	【萱】 わすれぐさ、園芸かや。	【葉】 は、すゑ、わかれ。
【興】 おこる、おき、たふとぶ。	【腦】 あたまのしん。	【罰】 つみ、とが、つみす。	【編】 あむ、とづ、むすぶ。	【線】 すぢ。	【緘】 つとむ、つとむ。	【董】 ただす、はかる。	【萩】 よるぎ、園芸はぎ。	【葛】 くす。	【館】 俗字、(十七畫)の
【謀】 はかる。	【禪】 したおび。	【蝙】 かはほり。	【蝶】 てふ。	【蝗】 いなで。	【落】 くおつ、くだる。	【萬】 よろづ。	【茸】 ふく。	【葵】 あをひ。	【葦】 あし。

【誼】 よし、はかる。 したしむ。	【襪】 むつき。	【衛】 衛(十六卷)の 俗字。	【蝟】 かたつぶり。	【蝸】 むら。	【葎】 むら。	【質】 もの、もと、か らだ、ただ、か なほし。	【論】 はかる、たさむ、 おけつらふ、さ ばく。	【談】 はなす、 ものがたり。	【諭】 おもふ、 つぐ。
【課】 わりあて、みづ はかる。	【複】 かさね。	【衝】 つきあたり、 うごけ、つぐ。	【蝠】 かはほり。	【蝕】 かく、 やぶる。	【蝦】 えび。	【賞】 ほめる、たさむ、 すすめる。	【賢】 かしこし、かた、 まさる。	【調】 ととのふ、あは する、てうし、あは かる。	【諷】 はかる。
【醜】 あひ心地。	【部】 すぶ、つかさ、 こわけ。	【進】 すすむ、のぼる、 いたす、つとむ。	【輦】 てくるま。	【輝】 てる、ひかり、 かがやく。	【賦】 みづき、ふやく、 はかる。	【賣】 うる、ひさぐ、 あざむく。	【賜】 たまふ、あたふ、 めいむ。	【諒】 まこと、さとる、 あきらか。	【諄】 いたる、あつし、 ろく、ねんて
【銳】 するどし、さと ものはやし、は	【醇】 あつし、くわし、 つつしみふかし	【郵】 すしゆくば、 すぐる。	【遊】 遊(十六卷)の 俗字。	【輩】 ともがら、 くらぶら。	【趣】 おもむく、はし る、わけ、むね。	【輦】 かたし。	【霆】 いなびかり。	【陣】 ならぶ、 そなへ。	【鋒】 きつさき、 ほこさき。
【鋤】 すき、 たがやす。	【醉】 まよ。	【郭】 そとがわ、 そとがこひ。	【逸】 はやる、すゆる、 はやまる。	【輪】 わ、くるま、 まる。	【踐】 ふむ、したがふ ゆく。	【頤】 おとがひ、 やしなふ。	【霈】 おほあめ、 はげし。	【震】 ふる、おしん、 いきほひ。	【閱】 けみす、しらぶ、 えらぶ、すべる。

【院】 かき。	【霄】 きゆ。	【鞍】 くら。	【養】 やしなふ、 そだつ。	【駕】 のりもの、 のす。	【駐】 とどむ。	【鴈】 がかり、 がん。	【魄】 たましひ、 こころ。	【十六卷之部】 學者の稱。	
【儘】 すま、みな、 すべて、たとひ、 てがら。	【勳】 うたは、 はたらき。	【器】 かぐら。	【園】 かこむ。	【奮】 ふるふ、はげむ、 とぶ、おこる。	【嶮】 さげし、 さがし。	【儔】 ひとがら、たぐ し、たれ、おほ	【冀】 こひねがふ、 のぞみ。	【叡】 さとる、あきら か、とほる。	【瞻】 ものいふ、 しやべる。
【壇】 には。	【學】 まなぶ、わざ、 さとる。	【憲】 よろこぶ、よし このむ。	【儕】 ひとがら、たぐ し、ひとに、ひ	【劒】 劒の古字。	【曖】 いき、 おくび。	【噴】 はく、 しかる。	【壁】 かべ、 とりで。	【導】 みちびく、 をさむ。	【憬】 さとる、とほし、 あこがれる。
【憲】 のり、てほん、 のつとる。	【憐】 あはれむ、 いつくしむ。	【撒】 ちらす、まく、 はなつ。	【播】 まく、しく、のぶ あふる、ちらす。	【整】 ととなふ、ただ し、をさむ、整 の俗字。	【嗽】 あさひ、 ひので。	【橘】 たちばな、 たか。	【橋】 わたす。	【築】 したる、 しべ。	【橙】 だいたい。
【憧】 あこがれる、 おろか。	【戰】 たたかふ、 そよぶ。	【撰】 えらぶ、つくる、 のり。	【撲】 うつ、 たふす。	【曉】 あかつき、さと す、あき、あき らか。	【曆】 こよみ、 かす。	【樺】 かば。	【檣】 そり。	【樵】 きこり、 やく、たく。	【檣】 ざくろ。

【櫛】 同字かし。	【樽】 たる。	【樹】 たき、らう、 たつ。	【横】 よこ、かたはら、 よこぎる。	【機】 しかけ、はたお くり、きざし、た くみ。	【曇】 くもる。	【撫】 なでる、 したがふ。	【撞】 うつ、 うつく。	【撮】 とる、つかむ、 すべて。	【撫】 いつくしむ。
【積】 たくはふ、 たぐひ、かさなる	【積】 かばら、 すなはち。	【蔓】 いらか。	【燎】 にはび、かか り、あきらかり	【燈】 あかり、 あかり。	【熾】 あかす、 さかんなり。	【燁】 かがやく。	【潭】 ふかし、 ふち。	【潤】 うるほふ、つか まうけ。	【歴】 わたる、つたふ、 ゆく、こゆ。
【穆】 むいね、 むむ。	【磨】 みがく、する、 かたし。	【盧】 あし、 くろいろ。	【璃】 寶玉。	【燉】 火の盛なる器。	【燒】 やく、 あかす。	【燕】 やすむ、 やすむ。	【澄】 すむ、すみ、き よし、きよむ。	【瀉】 ひがた、 ひがた。	【潔】 きよし、 いきよし。
【窺】 うかがふ、 のぞく。	【穎】 ほさき、ひで、 字、いづ、類は俗	【瞞】 くらます、 くだます。	【瓢】 ひくべ、 ひさご。	【燐】 おにび。	【燃】 もゆ、 あかす。	【烹】 あぶる、 あきらか。	【潮】 うしほ、しほ、 うしほ。	【潛】 ひそむ、ふかし、 しほむ。	【澁】 とどろぼる、 とどろぼる。
【簞】 みの。	【衛】 ふせぐ、もり、 いとなむ。	【蓉】 はちす。	【蓆】 むしろ、 大いなり。	【蒔】 ちらす、 國書ま。	【罷】 やすむ、 やすむ。	【縉】 縉も同じ、うす あか、懸濁。	【糖】 さとう、 あめ。	【篠】 ささ、 しのだけ。	【箒】 かがり。

【節】 ふるひ。	【衡】 はかる、ひとし、 ひら。	【螢】 ほたる。	【蓄】 たくはふ、やし なふ、あつむ。	【蕤】 くしげし、 くさむら。	【蓑】 おほふ、 おほふ。	【翰】 ふみ、もと、 とぶ。	【縛】 しばる、 いましむ。	【縞】 同音しま。	【築】 きづく。
【親】 ちか、おや、 めがむ。	【襁】 ころも、 うはぎ。	【融】 とほる、あきら、 みち、とける、 たのしむ。	【蒲】 がま。	【蒸】 おほし、むす、 ふかす。	【蒼】 あを、 しげる。	【膏】 あぶり、 うるほひ。	【罵】 ののしる。	【縣】 あがる、 あがる。	【篤】 あつし、ふかし、 もつばら。
【諳】 つらみ、 つらみ、さとする。	【鋼】 はがね。	【都】 みやこ、うつく し、さかんなり	【遂】 とぐ、とほる、 なす、したがふ	【遠】 遠字(十七畫)の	【辨】 わかたつ、 わかまへ。	【頼】 よる、たよる、 より、たのむ。	【諦】 あきらか、まこ と、あきらむ。	【諫】 いさむ、たす、 さとす。	【謁】 まをる、まみえ まをす。
【謂】 いふ、とく、 おもふ。	【錦】 にしき、かね、 あやおり。	【醒】 さめる、 ささる。	【道】 みち、よる、 をさむ。	【遇】 あふ、 まつ。	【遊】 あそぶ、 たのしむ。	【蹄】 ひづめ、 ふむ。	【諭】 さとす、あきら む、つぐ、いさ む。	【諺】 ことわざ。	【諤】 ただしく言ふ、 罪にも作る。
【錚】 どら。	【鋸】 のこぎり。	【醒】 清純なるもの。	【達】 とほる、たつす、 さとする。	【違】 いま、いとま、 いそぐ。	【運】 めぐる、はこぶ、 ゆく。	【輯】 あつむ、 たさむ。	【豫】 たのしむ、あ ら、かじめ、あづ か。	【諸】 もろもろ、 これ。	【誠】 まこと、 きはらぐ。

【陶】 タウ すへ、ただす、 たのしむ。	【錠】 テイ ぢやうまへ。	【錐】 スイ ときり、 とし。	【黙】 ボク しまる、 しづか。	【餘】 ヨ のこり、 あまり。	【鞘】 セウ さや。	【霏】 ヒ もや、 もや。	【陸】 リク をか、あつし、 大か、みち。	【陞】 ス ほと、 國晉さかひ。	【錢】 セン かね、 か。
【靜】 セイ しづか、はかる、 やすし。	【覓】 ミ にじ。	【陳】 チン のぶ、おほし、 おほふ、しめ。	【陰】 イン ひかげ、しめる、 おほふ、おほし。	【錫】 セキ すず、ぢやう、 しやくぢやう。	【龍】 リウ たつ。	【鳴】 メイ か。	【頰】 ケツ ほほ。	【霖】 リン ながあめ。	【陵】 リョウ 大いなるをか、 みさぎ、けは
【彌】 ミ や、や、 あまねし。	【孀】 ジュウ そばめ。	【勵】 レイ つとむ、 つとむ。	【備】 ビ でく、 やぶる。	【償】 シヤウ つぐのふ、むく かへす、あがのふ、 かへす。	【優】 ユウ ゆたか、しとや まなし、あ まなし。	【龜】 キ かめ。	【鴛】 ユウ をし、 しどり。	【頭】 トウ かしら、い、ただ き、かみ。	
【懌】 エキ よろこぶ。	【嶽】 ガク たけ。	【塚】 サカ ほり、 いけ。	【檢】 ケン ふら、たたす、 のり。	【櫃】 ケツ え、もちの木、 さかんなる櫃。	【斂】 レン あつむ、 あつむ。	【擇】 タク えらぶ、 よりわける。	【撿】 ケン つかぬ、とりし まる、かんがへ る、あぐ、あぐへ	【擒】 キン とりこ、 とらふ。	【憶】 オク おもふ、 おぼへる。
【應】 オウ まさ、まさ、 たか、たがふ。	【嶼】 シヨ こじま。	【壑】 ゴク たに、 みぞ。	【檣】 シヤウ ほばしら。	【檠】 ケイ ともしびだい。	【檐】 エン かた、 かつぐ。	【擔】 タン かた、 になふ。	【操】 サウ みさ、 みさ。	【擎】 ケイ ささぐ、 あぐ。	【懇】 コン ねんせつ、 しんせつ。

【營】 エイ いとむ、さか え、とり。	【澤】 タク さは、あぐ、 する。	【斂】 カン おもふ、 ねがふ。	【檀】 タン まゆみ、施主に 用ゆる器。	【檄】 ゲキ めしぶみ、 ふれぶみ。	【檜】 クワイ ひのき。	【播】 ライ する、あぐ、 うつ。	【擅】 セン もつばら、 わがまま。	【擊】 ゲキ うつ、ころす、 おそふ、せめる。	【撼】 カン うごく、 ゆるがす。
【燦】 サン あきらか、 あざやか。	【濃】 ノウ あつし、 しげし。	【氈】 セン けむしろ、 もうせん。	【糟】 サウ かす。	【簇】 ソク やじり、 やじり。	【禪】 ゼン ゆづる、 ざぜん。	【矯】 ケウ ただ、つよし、 ただ。	【瞳】 トウ ひとみ。	【獨】 ドク ひとり、 ただ。	【燧】 スイ ひうち、 のろし。
【燭】 シヨク ともしび、 てらす。	【澗】 ケン よど、かす、 おど。	【激】 ゲキ はげし、はげむ、 すみやか。	【嶺】 レイ みね。	【篷】 ホウ とま。	【穗】 スイ ほ。	【磯】 イソ かはら。	【瞥】 ブツ ちらとみる、 ちらとみる。	【瞰】 カン みる。	【徽】 キ よし、 うつくし。
【縹】 ヘウ もえぎ色、	【縱】 シヨウ ゆるし、はなつ、 わがまま、自由。	【縮】 シユク ちぢまる、 たて。	【糠】 カウ ぬか。	【簣】 サク ゆかい、 ゆかい。	【攀】 パン あぐ、 かか。	【禧】 シキ よし、 よし。	【瞭】 リョウ あきらか。	【瞬】 シュン またたく、また たく短時間。	【矚】 シヨク さきに、むかふ、 あきらか。
【繁】 ハン しげし、おほし、 さかんなり。	【績】 セキ うむ、つむぐ、 わざ、しごと。	【襄】 シヤウ のほろ、 たかし。	【螳】 チヤウ かまきり。	【蓮】 レン はす。	【蔦】 テフ つた。	【蔘】 セン にんじん。	【膚】 フ はだ、 うすし。	【聰】 ソウ さとし、かしこ し、あきらか。	【翳】 エイ かげ、 かげ。

【聳】 ソウ つとつしむ。 つとつしむ。	【聯】 レン つづらね。 つづらね。	【臨】 リン のぞむ、かんが みる、たさむが	【蔗】 シャ さとうきび。	【蓬】 ホウ よもぎ、 こもぎ。	【蔭】 イン かげ。	【螺】 ラ ねじ。	【總】 ソウ あつむ、すべて、 あつむ、ふさ。	【縫】 ホウ ぬふ、ぬひ、 ぬひぬ。	【聲】 セイ ことば。
【膝】 シツ ひざ。	【艱】 カン なやむ、 なやむ。	【蔬】 ショ な、 あをもの。	【蓼】 レウ たで。	【襖】 ホウ ほむ、あつむ。 襖(十五畫)は 俗字。	【襪】 ヤク むつき。	【講】 コウ あきらか、なら ふ、きはむ、は る。	【謙】 ケン へりくだる、 うやまふ。	【谿】 キ たに。	【遠】 エン ひろし、 とほし、はるか、
【郷】 コウ さと、むら、 ところ。	【鍵】 ケン かぎ。	【鋏】 セツ すき。	【鍊】 レン ねる。	【隅】 ゴ すみ、きし、 かたはら。	【隆】 リウ たかし、ゆたか、 さかんなり、あ つし。	【霽】 セイ みぞれ。	【謝】 シャ あやまる。	【趨】 シュ はしる、おもむ く、いそぐ。	【遜】 スン ゆるぶる、 したがふ。
【醞】 ウン かもす、 しとやか。	【鉞】 セン はり、 きす。	【鍛】 タン ねる、 きたふ。	【闊】 クワ ゆるやか、 ひろし。	【隊】 タイ くみ、わかっ、 おとす。	【隈】 ライ すみ、 すみ。	【霞】 カ はるか、 同音かすみ。	【豁】 クワ むならか、 むなし。	【遙】 エウ はるか、とほし、 さまよふ。	【遞】 ダイ かはる、 しゆくば。
【鏢】 バウ きは。	【鍾】 シュウ あつむ、 つりがね。	【錨】 ベウ いかり。	【階】 カイ きざはし、 はしご。	【陽】 ヤウ ひ、きよし、 あきらか。	【隸】 レイ 隷に作る、つく、 したかふ、てし た。	【霜】 ソウ しも。	【鞠】 キク からぢ、けまり、 ただす、くがむ。	【餞】 セン はなむけ。	【鮫】 カウ さめ。

【點】 テン ほし、ほち、 点は略字。	【韓】 カン みげた、 國名。	【餅】 ヘイ もち、 餅は俗字。	【鮮】 セン あざやか、 あきらか。	【齋】 サイ ものいみ、 國音いつき。	【館】 カン やかた、 やどや。	【駿】 シュン すぐれたるう ま、たかし。	【黛】 タイ まゆがき、 まゆすみ。	【鴻】 コウ おほとり、ひろ、 おほい。	
【儼】 エン うや、 うら。	【戴】 タイ うたたく、 うける。	【擦】 サツ なでる、 なでる。	【囉】 ラ かばかり、 かがやく。	【檻】 カン おぼし、 おぼし。	【儲】 チヨ たくはへ、 たくはへ。	【擱】 カク おく、 おく。	【擡】 タイ あぐ、 あぐ。	【嚙】 ケン 夕日の光、 ひぐれ。	【權】 ケン かぢ、 かぢ。
【叢】 ソウ あつむら、 あつまる。	【擬】 ギ まねる、 まねる。	【斷】 ダン たつ、きく、わ かつ、断(十一 畫)は俗字。	【曙】 シュ あけほの、 あかつき。	【歸】 キ かへる、しとが つぐ。	【濠】 カウ ほり。	【濡】 ジュ ぬらす、 うるほひ。	【濯】 タク すすぐ、 すすぐ。	【濛】 ボウ こくらし、 こくらし。	【獐】 チャウ あし。
【瞿】 ク おそる。	【礎】 ソ いしすま、 とだい石。	【簣】 サ あじか。	【箆】 ヘイ かたみ。	【織】 シヨク おる、はた、 しるし。	【潤】 ジュン 潤(第十七畫)の 俗字。	【濟】 セイ わたる、とどむ、 なす。	【濤】 タイ ぬかる、 きよし。	【爵】 シヤク つからみ、 つかさ。	【獵】 リョク 俗字(十九畫)の
【險】 ケン まぶた。	【禮】 レイ のり、ぎしき、 作法、おじき。	【簪】 サン かんざし、 はやし。	【糧】 リョウ かて。	【繕】 セン つくらふ。	【濕】 シツ うるほひ、 うるほひ。	【濤】 タイ なみ、 おほなみ。	【濱】 ヒン はま、 みぎは。	【獲】 クワツ えもの。	【環】 クワン たまき、 たまき。

【瞻】^{セン} 【簡】^{カン} 【簫】^{セウ} 【繡】^{シウ} 【緡】^{セウ} 【翻】^{ホン} 【膳】^{セン} 【蕊】^{ズイ} 【蕃】^{ハン} 【覆】^{フク}

あきら、あふぎみる。
ふみ、てがみ、しよもつ、つづめる。
ふえ、しのだけ。
ぬひ、にしき。
ひもとく。
ひるがへる。
めくらよ、めし。
しべ。
まじげる、よえる、まがき。
おふ、おつがへる、

【謹】^{キン} 【躡】^{シツ} 【適】^{テキ} 【鎧】^{ガイ} 【鎮】^{チン} 【翼】^{ヨク} 【舊】^{キウ} 【蕉】^{セウ} 【蟬】^{セン} 【觴】^{シヤウ}

つつしむ、いましむ。
さきばらい。
ゆく、かなふ、大のしむ。
よろひ。
鎮の俗字。
つばき、たすく。
ふるし、もと、むかし。
はせを。
せみ。
さかづき。

【警】^{ケイ} 【轉】^{テン} 【鄙】^ヒ 【鎖】^サ 【錠】^{テイ} 【職】^{シキ} 【蔭】^{イン} 【蕩】^{タウ} 【蟲】^{チュウ} 【謳】^ウ

せきはがき、せきはらひ。
はこぶ。
ひな、あなか、いやしむ。
とざり、とざす。
おもり、かなづち。
やくめ、つかさ、つとめ、みつぎ。
字(蔭十七畫の俗)
あらふ、はらふ、大いなる鏡。
むし。
うたふ、うたふ。

【豐】^{ホウ} 【遭】^{ソウ} 【醫】^イ 【鎮】^{チン} 【鎌】^{レン} 【闕】^{ケツ} 【雛】^ス 【顔】^{ガン} 【騎】^キ 【鴟】^チ

ゆたか、とよ、大いなり。
あふ、めぐる。
いしや、やす、とどむ。
しづむ、おさむ、やす、とどむ。
かま。
はかく、はぶく。
ひな。
かほ。
のる。
ほととぎす。

【雞】^{ケイ} 【鞭】^{ベン} 【題】^{タイ} 【鯉】^{レイ} 【鵠】^{コク} 【維】^ヰ 【額】^{ガク} 【馥】^{フク} 【鵝】^ガ 【燿】^{ヤウ}

又關に作る、にはとり。
むち、むちうつ。
かしら、しるし、とひ。
こひ。
白鳥。
まじる、あつむ。
さだめ、かぎり、さだめ。
かほり、かほり。
がてら。
かがやく、てらきら、ひかる、あ

【鷹】^{トウ} (鷹字)
十九畫之部

【勸】^{ケン} 【廬】^ロ 【攀】^{ハン} 【櫟】^{レイ} 【嚮】^{キヤウ} 【擴】^{クワク} 【曠】^{クワク} 【櫓】^ロ

すすむ、つとむ、たすく。
いはり、よる、かりや。
よぶ、ひく、つかまる。
くぬぎ。
むかふ、もてな、し、ひびく。
おしひろめる。
あきらか、ひろいなり、大ものみやう。

【寶】^{ホウ} 【擲】^{シツ} 【櫛】^{シツ} 【瀉】^{シャ} 【瀼】^ニ 【瀉】^ニ 【瀉】^ニ 【瀉】^ニ 【瀉】^ニ 【瀉】^ニ

寶(二十畫)の俗字。
なげる、ふるよ。
くし。
そむ。
すむ。
けだもの。
いのり。
ひさし、のき。
すだれ。
むすぶ、むすぶ。

【臆】^{オク} 【膺】^{ヨウ} 【蕭】^{セウ} 【薇】^ヒ 【濺】^{セン} 【獵】^{レイ} 【穩】^{オン} 【簾】^{レン} 【繹】^ニ 【繭】^{ケン}

おね、こころ、おもひ。
おね、おね、おね。
しよぎ、しよか。
いばら、いばら。
そま。
かり、かる、とらふ、かる。
おだやか、やす、さだまる。
あふる、よなぐ。
ひく、たづぬ、をさむ、つらぬ。
まゆ。

【膽】^{タン} 【薪】^{シン} 【薜】^{セツ} 【蕾】^{レイ} 【瀑】^{ボク} 【璽】^シ 【穫】^{クツ} 【簿】^ホ 【繪】^{エイ} 【繩】^{ジヨウ}

きも、たきぎ。
よもぎ。
つばみ。
たき。
しるし、印。
かる、いれ、かり。
ちやうめん、ぼ。
ま、ぬひ、まがく。
なは、ただす、はかる。

【臂】^ヒ 【薔】^{シヨウ} 【薔】^{シヨウ} 【薔】^{シヨウ} 【蟹】^{カイ} 【蟻】^イ 【襟】^{キン} 【譏】^シ 【辭】^ジ 【遼】^{レイ} 【鏗】^{ケイ}

ひぢ。
みづたで、ばら。
なぐ、きる。
かに。
あり。
むえり、むえり。
をしよ、譏、ほめる、えらぶ。
ことば、よみ、ゆづる。
とほるか、とほし。
金石の鳴る聲、つく。

【關】 あづかる。あづかると、あづかると。	【鏡】 かがみ、あきらめがね。	【遵】 したがふ、のつとる。	【贊】 ほめる、たすく、あきらか。	【識】 しる、みわけ、のり、つね、しるし、あらはす。	【蠟】 かまきり。	【壚】 しほ壚(二十四畫)に同じは俗字。	【鯨】 くぢら。	【韻】 ひびき、てうし、やうす。	【鏤】 ちりばむ、ひらく。			
【霧】 きり。	【鎚】 やじり、かぶらや。	【鄰】 又隣に作る、となり、ちかし。	【選】 えらぶ。	【贈】 つかはす。	【證】 あかす、しようこ、さとる。	【襖】 うはぎ、岡音ふすま。	【麗】 うるはし、よし、はなやか。	【鵲】 かさきぎ。	【願】 ねがひ、のぞみ、おもひ、いのる。			
【瓊】 うつくしき玉、美の形容。	【瀝】 そたたる、そそぐ。	【懸】 かく、つた。	【寶】 たつと。	【嚴】 おごそか、いまいましむ。	二十畫之部				【麴】 かうぢ。	【麓】 ふもと。	【鳴】 おほとり。	【類】 たぐひ、なま、しな。
【籃】 かご。	【競】 きそふ、あらしふ、つよし、すむ。	【礦】 あらがね。	【犧】 いけにへ。	【隴】 おぼろ。	【邁】 ゆく、すや、さむ、つとめはげむ。	【壞】 つち、ゆたか。	【纂】 あつむ、つぐむ。	【籌】 かすとり、かすはかる。	【礫】 こいし。			
【辦】 あむ、くみあはせ。	【藏】 たさむ、かくす、くら。	【繼】 つぐ。	【籍】 ふみ、しよもつ、しく。	【礮】 礮物の名。	【澗】 かたは俗字、ささぐすむ。	【澗】 きよし。	【懷】 おもひ、なぐく。	【孃】 むすめ。	【縞】 うすぎぬ、しゆす。			

【羅】 あみ、かかると、あみ、かかると。	【霰】 あられ。	【鐘】 つりかね。	【瞻】 たも、ゆたか、にぎはふ。	【議】 はかる、えらぶ、のり、あげつらふ。	【覺】 さとる、大いなり、なほし。	【薯】 やまのいも。	【藤】 いくさふね。	【耀】 かがやく、あきらひかる。	【熊】 ひぐま。	
【羈】 羈は俗字、きづひ、あしてま。	【露】 つゆ、あははす、うるほふ。	【鏡】 あぶみ。	【還】 かへる、めぐる。	【警】 いましめ、まもり、つつしむ。	【觸】 ふれる、をかす。	【藍】 あゐ。	【薩】 すくふ。	【藁】 わら。	【臍】 へそ、ほそ、すべて。	
【馨】 かをる、かんとし。	【颯】 ただよふ、つむじかぜ。	【闡】 ひらく、あきらか、ひろむ、あきら。	【釋】 とく、きゆ、ゆるす、さとる。	【羸】 あまる、つつむか、あふる。	【譯】 わけ、へ。	【襦】 じゆばん。	【藉】 たすく、なぐさむ、すむ、か。	【薰】 かをる、しげ、いさを。	【艦】 いくさふね。	
【藤】 かづら、ふじ。	【艦】 同じ(十九畫)に。	【續】 つぐ、つづく、つらなる。	【籐】 とら。	【欄】 てすり。	【攘】 はらふ、ぬすむ。	【儷】 たぐひ、なま、ならぶ。	二十一畫之部		【黨】 くも。	【騰】 あがる、のぼる、たかし。
【巍】 たかし、大いなり。	【譽】 ほまれ、たへる、たかし、のり。	【藥】 くすり、いやす。	【藝】 わざ。	【纏】 まとふ、あぐる、からむ。	【縷】 しぼり。	【殲】 つくす、ほろぼす。	【櫻】 さくら。	【屬】 つぐ、したがふ。	【護】 まもる、たすく、すくふ。	

【竈】かまど、へつつち。
 【織】織(二十三畫)の俗字。
 【臘】とし、十二月の異名。
 【藪】さは、回音やぶ。
 【蠟】ちんそく。
 【贖】はなむけ、せんべつ。
 【躍】をどる、あがる、こゆ。
 【邇】ちかしく、ちかづく。
 【鋪】かめ、つば。
 【霸】はたがしら、覇は俗字。

【翻】ひるがへる。
 【驅】かろ、およ。
 【鷄】にはとり。
 【轟】とどろき。
 【鐸】大きいすず。
 【隨】したがふ、まかせらる。
 【鞦韆】わらわづ。
 【饌】ぜんだて。
 【鶯】うぐす。
 【辯】わかつ、あきらか、ただす、と

【鐵】くろがね、かなもの。
 【隱】かくる、のがる、かすか、よる。
 【顧】かりみる、むくゆ。
 【饒】ゆたか、おほし。
 【鶴】つる。
 【儼】おごそか、つつしむ、ちやまふ。
 【誌】よし、うるはし。
 【囊】ふくろ、つづむ。
 【攝】かぎ、かかはる。

【巔】いただき。
 【權】はかる、よし、ちから。
 【歡】よろこび、よし、たのしみ。
 【疊】おに同じ。
 【聽】きく、まつ、さばく。
 【蘇】よみがへる、とる。
 【覽】みる。
 【邊】ほとり、べ、かぎり。
 【鑄】いる。
 【餐】もてなすす、む、さかるとり。

【麟】きりん。
 【灌】そそぐ、あつむ。
 【穰】わら、ゆたか、さかんなり。
 【艦】とも、へまき。
 【蘆】よし、よし。
 【讚】讚(二十六畫)の俗字。
 【鑑】かんがみ、かんがへ、みる、かんわけ。
 【鬚】はる。
 【髻】ひげ。
 【擗】けやき。

【豐】かさね、おそろ、たむ。
 【籠】かて、つつむ。
 【藻】あや。
 【襯】はがぎ、じゆばん、よむ。
 【讀】よむ。
 【鑿】鑿に同じ。
 【響】ひびき。
 【鰻】らなぎ。
 二十三畫之部
 【巖】いはは、いはや、けはし、がけ。
 【灑】そそぐ、ふるふ。

【蘇】こけ。
 【變】かはる、うつる、うごく、みだれ。
 【驛】うまや、しゆくば。
 【體】からだ、もと、すがた。
 【戀】こひ、こふ、したふ。
 【籤】しるし、みくじ、しるし。
 【蘭】香草の一。
 【鑛】あらがね。
 【驗】しるし、きざし。
 【鶯】わし。

【曬】さらす、のぶ、晒は俗字。
 【織】ほそし、こまかしなやか。
 【禪】國字たすぎ。
 【顯】あらはる、あき、ひかり。
 【髓】骨のすみ、中心の意。
 二十四畫之部
 【蠹】ひとし、なほし、なほ、そびゆ、たたい、なほ。
 【艷】つや、あやか、俗字(十九畫)は。
 【讓】ゆる、あたへる、ことわる。
 【罐】いれもの、かま。

【蠶】かひこ。
 【釀】かます。
 【臧】はらわた。
 【衢】みち。
 【鑪】ひどこ、ひばち。
 【隴】をか、うね。
 【靈】たま、かみ、よしいのち、まごころ。
 【鷹】たか。
 【鷹】たなびく。
 【靄】つよき勢。

【鷺】さぎ。
 【鬚】鬚のたびく。
 【鬪】鬪(二十畫)は俗字、たたかふ。
 二十五畫之部
 【廳】やべし、こゝろ。
 【觀】みる、のぞむ。
 【籠】すつほん。
 【籬】まがき。
 【鑰】ちやう、とづ。
 【蠻】やばん。

【雲】 雲のさかんなる

二十六畫之部

【灣】 湾 いらえ。

【羅】 羅 めぐる、みまはり。

【矚】 矚 みる、ながめる。

【讚】 讚 ほむ、たたへる、おきらか。

二十七畫之部

【纜】 纜 ともづな。

【鑼】 鑼 どら。

【驥】 驥 良馬。

假名字畫算定

假名は漢字の如く文字構成上の深い字源があるのでなく、その出生由来を釋ねれば、或は漢字の略形から來たものや、又草體から變化したものであります。例へば「リ」は利の草體であり「へ」は反の一部を略して出來上りたるものであり「ら」は良「き」は幾「つ」は門の何れも草體から來て居るが如きものであります。

片假名の方は「リ」「へ」の如く平假名の形と同一のものもあるが、全體から云へば字形が違ひ且つ其起りは多く漢字の一部分を切棄てた略形であり、或は略形の草書體であり、ハマヤラワ、キニキミシケセヘモチを除いた外は普通「省」きであります。その省きは多く舊形の一部で、偏なり冠なりを崩さずとその儘で現はして居ます。

いま参考の爲に現行の假名とこれに該當する原字とを對照すれば次のやうになります。

一、片假名

オ	エ	ウ	イ	ア
(於)	(江)	(宇)	(伊)	(阿)
コ	ケ	ク	キ	カ
(己)	(介)	(久)	(幾)	(加)
ソ	セ	ス	シ	サ
(曾)	(世)	(須)	(之)	(差)
ト	テ	ツ	チ	タ
(止)	(天)	(門)	(知)	(多)
ノ	子	ヌ	ニ	ナ
(乃)	(彌)	(奴)	(二)	(奈)
ホ	ヘ	フ	ヒ	ハ
(保)	(反)	(不)	(比)	(八)
モ	メ	ム	ミ	マ
(毛)	(女)	(牟)	(三)	(萬)
ヨ		ユ		ヤ
(與)		(由)		(也)
ロ	レ	ル	リ	ラ
(呂)	(礼)	(流)	(利)	(良)
ヲ	エ		キ	ワ
(乎)	(惠)		(井)	(和)

二、平假名

ほ	に	は	ろ	い
(保)	(仁)	(波)	(呂)	(以)
ぬ	り	ち	と	へ
(奴)	(利)	(知)	(止)	(反)
よ	か	わ	を	る
(與)	(加)	(和)	(遠)	(留)
ね	つ	そ	れ	た
(根)	(門)	(會)	(礼)	(太)
る	う	む	ら	な
(爲)	(宇)	(武)	(良)	(奈)
ま	や	く	お	の
(末)	(也)	(久)	(於)	(乃)
て	え	こ	ふ	け
(天)	(衣)	(己)	(不)	(計)
め	ゆ	き	さ	あ
(女)	(由)	(幾)	(左)	(安)
も	ひ	ゑ	し	み
(毛)	(比)	(惠)	(之)	(美)
		ん	す	せ
		(无)	(寸)	(世)

斯様に現行假名の源はそれぞれ明瞭に推定することが出来ますが、之はきまつてしまつた後から唯元に遡る丈のことで、其系統上「カ」より加を「タ」より多を推することが出来るが其原字は最初から一に定まつたものではなく、加に對して可があり、之に對して志があり、乃に對して能があり、安に對して阿があり、更に奈は下半の示のみで「ナ」にあてたともあり須は頁のみで「ス」になることもありました。

斯様に同一の音に對し色色の漢字が用ひられたのは所謂萬葉假名の名残であり、色色の萬葉假名は漸次淘汰されて比較的度數の多く使用せられて居たものから今日の假名が生れ出たものであります。

従つて之を文字の靈動力の上から吟味すれば、假名は母體たる漢字の畫數に準すべきものゝやうであるが、今日に於ては既に千餘年の久しきに亙つて獨立したる文字として使用せられて居ますから恰も俗字が正字に據らずして俗字其儘の畫數を以て數理の靈動を發するやうに、假名自體の畫數に依て其靈動力を現すものであります。而して其畫數は全く筆勢の轉換を以て計算する外はありません。筆勢の轉換を基準とするが故に「そ」の如きを常用すれば四畫となり「そ」を

使用すれば三畫となり、「の」の如き一筆勢で書けば一畫となり二筆勢で書けば二畫となり、め、しの如く或は三畫或は二畫となることは平假名の字畫算定に特に注意すべき點であります。左に假名の字畫表を掲げておきます。

一、片假名の字畫算定（数は畫數を示す）

オ	エ	ウ	イ	ア	
(三)	(三)	(三)	(二)	(二)	
コ	ケ	ク	キ	カ	
(二)	(三)	(二)	(三)	(二)	
ソ	セ	ス	シ	サ	
(二)	(二)	(二)	(三)	(三)	
ト	テ	ツ	チ	タ	
(二)	(三)	(三)	(三)	(三)	
ノ	ネ	ヌ	ニ	ナ	
(一)	(四)	(二)	(二)	(二)	
ホ	ヘ	フ	ヒ	ハ	
(四)	(一)	(一)	(二)	(二)	
モ	メ	ム	ミ	マ	
(三)	(二)	(二)	(三)	(二)	
ヨ		ユ		ヤ	
(三)		(二)		(二)	
ロ	レ	ル	リ	ラ	
(三)	(一)	(二)	(二)	(二)	
ン	チ	エ		キ	ワ
(二)	(三)	(三)		(四)	(二)

二、平假名の字畫算定（数は畫數を示す、數字二種を示せるは書方により變化ある爲めなり。）

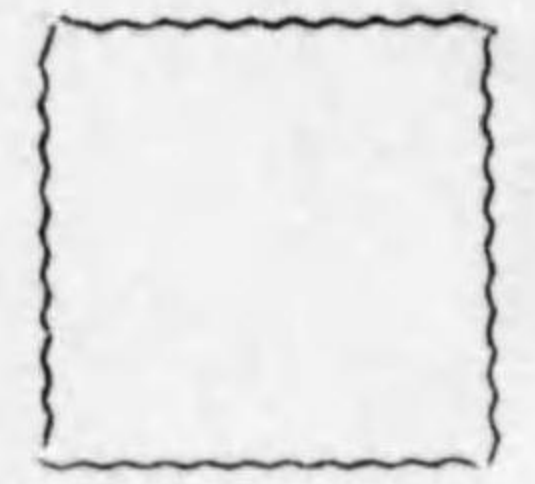
ほ	に	は	ろ	い
(五)	(三)	(四)	(二)	(二)
ぬ	り	ち	と	へ
(四)	(二)	(三)	(二)	(一)
よ	か	わ	を	る
(三)	(三)	(三)	(四)	(二)
ね	つ	そ	それ	た
(四)	(一)	(四三)	(三)	(四)
ゐ	う	む	ら	な
(三)	(二)	(四)	(三)	(五)
ま	や	く	お	の
(四)	(三)	(一)	(四)	(一)
て	え	こ	ふ	け
(二)	(三)	(二)	(四)	(三)
め	ゆ	き	さ	あ
(二)	(三)	(四)	(三)	(三)
も	ひ	ゑ	し	しみ
(三)	(二)	(五)	(二一)	(三)
		ん	す	せ
		(二)	(三)	(三)

天地の靈は數にそ宿るなれ
 ひとの命は名にそ宿れる
 健翁

價五百三十二圓

昭和六年十一月二十五日發行
 昭和八年六月廿六日十一版

不許複製



『姓名の哲理』 (金壹圓五十錢)

著者	熊崎健翁
發行者	熊崎健一郎
印刷者	田中克幸
印刷所	鷺峰社
發行所	五聖閣出版局

東京市神田區須田町一丁目五番地
 五聖閣出版局
 神田電話(五)一六〇三番
 振替東京七七五七二番

終